

研究者になる！



研究者  
になる！

2016 - 2020

# 研究者になる！

---

京都大学男女共同参画推進センター



## 研究者になる！！

京都大学男女共同参画推進センターは、2006年に設置された京都大学女性研究者支援センターを前身として2015年に現在のように改称して活動を続けています。

その一環として、これまで15年にわたってセンター事業の広報紙としてニュースレター（「たちばな」）を発行してきましたが、その数は2021年3月末までに95号となりました。

その中には、本学で活躍されている女性研究者の教員の方々のライフコースを振り返っていただく「研究者になる！」というコーナーがあります。

研究者への道を選択されたきっかけ、研究の面白さや困難、ターニングポイント、研究生活が続けていく秘訣など、率直に語っていただいています。これから研究者を目指す学生・院生・研究員の方たちはもちろん、女子高生や一般の方々にも関心を持っていただける楽しくまた読み応えのある内容で、これまでに82回82人の方々に登場していただいています。

このコーナーを取り出してまとめた冊子として、2010年3月に22回分を英訳と共に、さらに2016年3月に23回から54回までを発行し、大変に好評をいただいています。

これに続いて、今回は55回から82回までをまとめて発行することにいたしました。さまざまな世代や分野の方々にご執筆いただき、京都大学の現在を感じていただける内容になっていると思います。

なお、1995年度から2020年度までの5年間の「男女共同参画アクションプラン」は1年間延長し、各部局のご協力を得ながら次期アクションプランに向けてより充実した支援事業に発展させていきますので、引き続きご支援・ご協力のほどよろしくお願いいたします。

京都大学 理事・副学長（男女共同参画、  
国際、広報、渉外（基金・同窓会）担当）  
男女共同参画推進センター長

稲垣 恭子



## 目 次

いしい みほ 石井 美保 (人文科学研究所・准教授) .....	6
たかはし よしこ 高橋 淑子 (理学研究科・教授) .....	8
こにし ゆきこ 小西 由紀子 (理学研究科・准教授) .....	10
きもと さゆり 木元 小百合 (経営管理大学院・准教授) .....	12
こやま りな 小山 里奈 (情報学研究科・准教授) .....	14
くはばら ともこ 桑原 知子 (教育学研究科・教授) .....	16
いけだ はなこ 池田 華子 (医学部附属病院・准教授) .....	18
かなみつ けいこ 金光 桂子 (文学研究科・教授) .....	20
さかい しょうこ 酒井 章子 (生態学研究センター・准教授) .....	22
きたじま かおる 北島 薫 (農学研究科・教授) .....	24
かとう かりん 加藤 果林 (医学部附属病院 麻酔科・助教) .....	26
やまね ひさよ 山根 久代 (農学研究科・准教授) .....	28
おびや ちか 帯谷 知可 (東南アジア地域研究研究所 社会共生研究部門・准教授) .....	30
まつお ひろこ 松尾 寛子 (学生総合支援センター・特定准教授) .....	32
たけうち りお 竹内 里欧 (国際高等教育院・准教授) .....	34
ふなびき やすこ 船曳 康子 (人間・環境学研究科・教授) .....	36
アスリ チョルパン (経営管理研究部・教授) .....	38

みやげ	かなえ	三宅 可奈江 (医学研究科・特定助教) ……………	40
おだ	ゆかこ	小田 裕香子 (ウイルス・再生医学研究所・助教) ……………	42
なかむら	さえ	中村 沙絵 (アジア・アフリカ地域研究研究科・准教授) ……………	44
ふかざわ	あいこ	深澤 愛子 (高等研究院物質—細胞統合システム拠点・教授) ……………	46
やまむら	あき	山村 亜希 (人間・環境学研究科・教授) ……………	48
いしはら	まさえ	石原 正恵 (フィールド科学教育研究センター・准教授／芦生研究林 林長) ……	50
はっとり	ゆかこ	服部 佑佳子 (生命科学研究科・助教) ……………	52
きとう	やよい	鬼頭 弥生 (農学研究科・講師) ……………	54
みの	かずえ	三野 和恵 (教育学研究科・助教) ……………	56
さわだ	まい	澤田 茉伊 (工学研究科・助教) ……………	58
たづる	すやこ	田鶴 寿弥子 (生存圏研究所・助教) ……………	60



石井美保  
(人文科学研究所・准教授)

### さよならイキイキ・モデル

女性研究者への応援冊子ともいうべき『たちばな』という媒体に、「研究者になる！」という連載タイトル。この条件での執筆となると、何とはなしに、「研究も家事も育児も、大変だけど毎日充実しています！」という、ポジティブでエネルギー溢れる文章を書かなくてはならないような気がしてくる。こうした模範的なイメージを、ここでは仮に「イキイキ・モデル」と名づけたい。仕事と家庭生活を両立し、イキイキと輝いている女性研究者像である。

でも待てよ、と思いとどまる。この冊子の主な読者層が若手の女性研究者だとしたら、そうしたモデルを提示されるのは、ちょっと息苦しくなることではないか。ちょうど、「女性が輝く日本！」といった上からの掛け声に、息苦しさを感ずると同じように。切れ目のないキャリア、自己点検・評価、論文執筆に学会発表。家事に育児に介護。私たちの周りはずでに、身動きのできないほどの「マスト」項目で埋まっている。この小さなエッセイの中

でまで、イキイキ・モデルを奨励しなくてもよいだろう、と思うことにする。

私の専門は文化人類学である。女性研究者のおかれる状況は、理系か文系かによって随分変わってくると思うが、文系の中でも文化人類学は、長期のフィールドワークが必須という点で特殊だといえる。大抵の学生は、博士課程在籍時に一年ほどの現地調査を経験する。私の場合、2000年前後に通算15ヶ月間ほど、ガーナの農村で調査を行った。研究テーマは精霊祭祀や呪術といった地域の在来宗教と、多民族社会における人々の関係性である。精霊を祀る司祭の家に居候させてもらい、宗教実践に関する調査を進める傍ら、村人の生活を知るために農地や森の中を歩き回った。

大学院博士課程といえば、年の頃は26歳前後。同年輩の友人知人はそろそろ結婚していくお年頃である。電気や水道のない村で、ときにスクールに叩かれ、マラリヤ熱に罹りつつ、呪術や儀礼について学び続ける日々。そんな私の元に、「私たち結婚しました！」という、幸せいっぱいの写真付きハガキ（日本から転送されてきた）が何枚

となく舞い込んでくる。これはなかなか、シュールといおうか、哀愁を誘うといおうか、「私って一体…」という気持ちになる経験である。

そんな私もどうか博士論文を提出し、学振PDの身分でアムステルダム大学に留学することになった。ここで私にとっての大問題は、留学期間が妊娠・出産時期とまるきり重なってしまったことである。おまけに、やはり人類学者である夫も同時期にインド留学が決まってしまった。仕方がないので、夫にはインドとオランダを往復してもらうことにして、オランダで出産してみることにした。結果としては、留学というよりも「産みに行った」というほうが相応しいオランダ滞在ではあったが、その中でも印象深い出会いはあった。アムステルダム大でポスドクをしていたマリーンは、私と同じくガーナ研究者。まだ1歳に満たない娘を研究会に連れてきて、ガーナ人の旦那さんと交替であやしていた。当時40歳にして既に著名な研究者であったビルギットは、9歳の息子の母であり、持病を抱えながらの研究生活。息子の誕生日に大掛かりなパーティを催したことを嬉しそうに話した後、ほっと息をついて、「でも大変よ」と呟いていた。おそらくは妊婦の身だったからこそ、研究という枠組みを離れて何か通じ合えたように感じた瞬間を、今もときどき思い出す。

オランダで長女を出産し、その6年後に日本で次女を出産。この十年ほど、二人の娘を調査地に連れていく「子連れフィールドワーク」を敢行中である。というと、調査地でも仕事と育児をこなす超イキイキ・ライフを実践しているようであるが、そうではない。何かと抜けている母を心配する子らに「ついてきてもらっている」というのが実情である。こんな風に、ときにジタバタ、ときにヨロヨロと過ごしているうちに、定年を迎えることになるのだろうか。いずれにしても私にとって、「キャリアも家庭も！」という無限のループからしばし逃れて、何者でもない自分のあり方を見直せるのは、やはりフィールドにいるときなのかもしれない。



## 高橋 淑子

(理学研究科・教授)

### 研究者になる ～ロールパン？～

私は1988年に理学博士の学位（京都大学）を取得して、すぐに日本を飛び出した。フランスに3年間、アメリカ3年間と渡り歩き、6年ぶりに日本に帰国した。日本を出る前は、「同じ能力だったら男を採用するぞ」と面と向かって言われるような社会だった。“こんな男社会なんかまっぴらごめんだ、もう日本なんかに戻るものか！”と日本を後にした。事実、フランスにいた3年間は、一度も帰国していない（その一番の理由は貧乏だったからである）。

ところが、帰国後6年ぶりにみる日本は、まるで手のひらを返したように変わっていた（少なくとも表面上は）。「女を採用しまーす！女、女、女を発掘しよう！」という、以前では信じられないようなかけ声があちこちから聞こえてきた。なにが気色悪いと思ったが、その理由は後にわかることになる。そのころから、「ロールモデル」という言葉を耳にするようになった。しかし当時の私はこういう言葉をきいたことがなかったので、「なんだ、

このへんてこなカタカナは？ きっと『ロールパン』を焼くときに使う鋳型みたいなものだろう」と思っていた（他にもやたらとカタカナ言葉が増えてきたのもその頃である）。

私の専門分野は発生生物学である。1つの受精卵から、どのような仕組みで脳や心臓、そして手足が出来上がるのかを理解する学問である。発生生物学は統合生物学であり、DNAや遺伝子のレベルから細胞や臓器の働きまでを視野に入れて、形作りの謎を解き明かす。有名なiPS細胞も発生生物学を基礎にして花が咲いた成功例の1つである。発生中の胚（人間でいえば胎児）の中でせつせと“仕事”をしている細胞をみていると、わくわくドキドキの連続である。

私は高校の時の先生のおかげで、生物学が大好きになった。当時実家から5分のところにあった広島大学理学部生物学科に入ったが、どうも期待とちがった。体育会のワンダーフォーゲル部だったので、授業はサボり倒して山ばかりいっていた。そうこうするうちに、当時の京都大学教授の岡田<sup>おかた</sup>節人<sup>とくんど</sup>先生が書かれた「試験管の中の生命」や

「細胞の社会」を読んで、すっかり動物発生の魅力にとりつかれ、岡田研究室の門をたたいた。

生まれて初めての下宿生活。私は究極の自由を獲得した。岡田研のドアを開けると、そこから一気に世界につながる感覚を覚えた。大学院ではES細胞（iPS細胞のもとになった細胞）を使った細胞分化の研究を進め、5年間で楽しく過ぎていった。しかし当時は、男でも就職は困難を極める時代である。ましてや女だと絶望的だった。そういうとき、フランスのニコル・ルドワン先生が第2回京都賞受賞のために京都に来られた。岡田節人先生の友人であったこともあり、私は彼女と話をする機会を得た。そのとき彼女から「私のところにポストクに来ませんか？」と尋ねられた。大感激して「はい、是非行きたいです」と答えるのに5秒もかからなかった。今のようにWebもemailも無い時代である。しかし、人生の選択をえいっ！と決めて、あとは腹をくくって死にもの狂いで走り抜くという道も悪くない。

大学院時代、女は私1人という状況であったのに対し、ルドワン先生の研究所では7割ぐらいが女性だった。加えて“ラテン文化の洗礼”も浴びて、まるで違う惑星に来たような気分だった。3年間の滞在のうち、前半では遺伝子のクローニングが難航してミゼラブルな毎日を送ったが、後半ではロ

ケット噴射のごとく一気に研究を進めた。前半期データに苦しんでいた時には私を罵倒し続けていたルドワン先生も、後半期では私を認めてくれたのか、夢一杯のディスカッションをしてくれた。そして私は、生物学の「本当のすばらしさ」を学ぶことが出来た。

冒頭に書いた“気色悪さ”とはなんだったのか。うわべだけのかけ声の裏に潜む「暗い影」を感じたように思う。その影は、その後の社会に新たなゆがみを生み、さらに悪いことに、それに批判的な言論も抑圧されつつある。その成れの果てがああのSTAP細胞事件だとすると、私が感じていた気色悪さとは、20年後のゆがんだ社会の予言であったのかもしれない。といっても800年以上も続いた日本の男社会を瞬時に変える特効薬などあるはずもない。大切なことは、社会のゆがみを受け入れながらも、それに対する批判的精神を堅持することであろう。少なくとも、私にとって「母」のような存在であるルドワン先生を、ロールモデルなどというカタカナで表したくはない。彼女は私にとって、永遠の「あこがれ」なのである。



## 小西 由紀子

(理学研究科・准教授)

### 研究者への道程と家庭との両立

2008年に京大数学教室に来て8年になります。実はずっとこの連載を楽しみにしていて、(1)執筆された方がどういう経緯で研究者への道を歩んでいくことになったのか、また(2)家庭との両立をどうされているのか、興味深く読ませていただいております。そういうわけで私もこの2点について書かせていただきます。

まずは(1)から。高校生のとき素粒子論に憧れて、大学では物理学を専攻しました。しかし、大学院で念願の素粒子論研究室に入れたのはよかったものの、そこで大きくつまずきました。修士1年のとき場の理論と弦理論の教科書を読むセミナーがあったのですが、難しかったです。そしてそれが終わったあとは自分でテーマをみつけて研究を始めなければなりません。しかし最新の論文もセミナーの講演もさっぱり分からずで、同期の人たちが着々と論文を書いていくのに焦る日々。ストレスで過食したり、不安で夜中に目が覚めるようになったりしました。鬱にならなかったのはひとえに妹と

いっしょに暮らしていたため研究以外に逃避できる場所があったからだと思います。見かねた先輩が共同研究に誘ってくださってなんとか論文を書くことができ、学位をとりました。

つまずいた原因は何だったのか、かなり考えました。一つは勉強の仕方にあったと思います。学部時代、私は講義内容しか勉強しませんでした。大学院での研究をみすえて専門の分野の勉強を始めておくべきでした。また、自主ゼミで他の人と議論しながら理解を深めるという経験を積んでおくべきでした。もう一つの大きい原因は私のコミュニケーション能力の低さだと思います。当時周りの人にもっと心を開いて相談していれば、どうするべきか指針を見つけられたのかもしれない。

さて、今でもそうだと思いますが、私が学位を取った頃の素粒子論業界は大変な就職難でした。大学教員になることはもちろん、国内でポスドクの職を得ることも難しく、優秀な人でさえ海外へ行かざるをえない状況でした。落ちこぼれの私を雇ってくれるところがあるはずありません。もうあとがないという思いで数理解析研究所の齋

藤恭司先生にお願いし、研修員としておいていただくことになりました。(研修員とは研究生のようなものです。)面識もなかった私をあたたかく受け入れてくださった齋藤先生とその研究室の方達には感謝してもきれません。そこでお世話になった3年間、毎週土曜日のセミナーでとても刺激を受けました。いくつか論文も書け、学振特別研究員となった後に京大数学教室に講師として採用されて現在に至ります。

次に(2)について。両親の不仲を見てきた私は中学生の頃から、結婚とは女性が苦勞するシステムであると考えていました。もちろんこれは一般論としては正しくありませんが、結婚して幸せな人もいるということが、頭では理解できてもなかなか納得できませんでした。やっと納得できたのは数理研時代に尊敬する女性研究者に出会ってからです。

その後共同研究者として夫と出会い結婚しました。研究者どうしだとよくある話だと思いますが、ずっと別居です。4年前妊娠した時に話し合い、夫の職場のある東京都では保育所入所が難しいことから、子供は私と京都で暮らすことにしました。夫は毎週末帰ってきて家事と子供の相手をしてくれます。それでも子供は夫が普段いないのが寂しいようですが、どうしようもありません。

子供がいると仕事にかけられる時間

が足りないと感じています。夕方、あと30分あればこの用事をすませられるのに、というときでも保育園へ迎えに行かなければなりません。家事は家電と食材宅配を利用してできる限り手を抜いていますが、それでも単身時代の倍以上やることがあります。また家で仕事をしていると子供が遊んでほしがるので、それもできません。もう少し大きくなったら子供が宿題をする隣で論文を読めるようになるのでしょうか。

たまに研究集会に行く機会があると浦島太郎状態の自分を意識してしまって落ち込みます。「自分は研究者としてやっていけるのか」と悩んだ院生時代に戻ったみたいです。でも家族と過ごす時間があるためか昔のように闇雲に不安ではありません。



木元 小百合  
(経営管理大学院・准教授)

### これまでを振り返って

以前から、このコーナーで多くの女性教員の方々のメッセージを読ませて頂いておりました。今回この依頼を頂き、私自身は、未だに悩みながら研究・教育者生活を送っていますので、何を書けばよいのやら……と悩みましたが、改めてこのコーナーを読み返し、いろいろな研究者がいてよい、と励まされましたので書かせて頂くことにしました。

私の専門は土木工学の中の地盤力学です。また2年ほど前から、工学研究科（社会基盤工学専攻 地盤力学分野）と経営管理大学院を併任で担当しております。経営管理大学院は今年でちょうど創立10周年を迎えましたが、文理融合のビジネススクールとして、経済と工学（主に土木系専攻）の教員で運営されています。経営管理大学院では、これまでの専門に関連する形で（例えばエネルギー問題、防災工学）、新しい講義を担当させて頂くなど、自身の専門を広げるため模索中ですが、ここでは主に地盤の研究者としてのこれまでを振り返りたいと思います。

高校の進路選択の際には、建築を専門としていた父の影響と、当時、地元である神戸の近くで明石海峡大橋の建設が進められていたことなどにも影響を受けたように思いますが、「土木は面白そう」という直感と、将来は手に職を、と考え工学部土木系の受験を決めました。京都大学へのあこがれもありました。土木系では、4回生で研究室に配属されますが、その時には「土（地盤）系」の研究室を選ぶことを決めていました。土の力学を当時は3回生ではじめて学びましたが、理論的に複雑でまだ分からない部分が多く、また理論だけではなく現場の経験によるところも大きいところに魅力を感じ、「土」を選びました。当時の指導教員で、その後長くお世話になることになった岡 二三生先生に、4回生の当初「なぜ土質力学を選んだのですか？」と研究室で聞かれ、自分の返事は忘れてしまいましたが、先生は「土の研究は、土の医者になるのと同じ。それぞれの現場で土の特性を知らなければならぬ」と仰い、やはり土を選んで正解だったと思いました。今も土は分からないことが多く、飽きることはあり

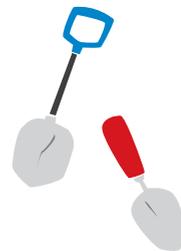
ません。

それ以来、修士・博士課程、その後の教員生活を含め、現在の研究室に18年在籍しています。当時は全く予想していなかったことです。当時も、工学部の大半の学生は修士課程後に就職していました。修士2年の進路選択の際、専門性を活かした仕事に就きたいと思い、民間企業への就職も考えていましたが、自分の希望するようにはいかず、そのころ、「博士課程で研究を続けるという道もある」、と指導教員であった岡先生に助言を頂きました。これは私が優秀な学生であったというわけでは全くなく、勉強がしたければウェルカムです、ということであったと思います。が、当時、博士課程で引き続き研究する、という選択肢に心が躍り、その思いにしたがって進学することを決めました。

その後、博士課程を経て、教員という立場になりました。その間も、研究が進まず、研究者に向かないのではないかと悶々としたこともあります。ここまでやってこられたのは、岡先生をはじめ、先生方、学生を含め、よい出会いに恵まれてきたことと、飽きずに継続できたためであると思います。現在は、講義担当や学内外での仕事も増えました。研究、教育、社会活動の場でいろいろな機会を頂きます。今も、これからの研究の方向性、教員としての理想像など、考えなければならない

課題は大きく、悩みは尽きません。が、とにかく何かを吸収して、続けることが大事と考えています。今後も自分と向き合い、周囲への感謝を忘れずに、日々精進したいと思っています。

女性という立場については、不満を感じたことはなく、逆に多くの機会を頂いてきたように思います。ただし、会議や学会でも女性がまだ少なく、マイノリティであることに慣れてしまいましたが、やはり窮屈に感じることはあります。もう少し女性が増えれば、活躍の場はさらに広がるように思います。最近では「ドボジョ（土木女子）」という言葉もありますが、この分野で女性研究者・技術者がもっと増えることを願っています。





## 小 山 里 奈

(情報学研究科・准教授)

### いつか「女性」研究者と呼ばれない日

「研究者になる！」に女性研究者の生き方をテーマとした文章を、という依頼を頂き、実は「あ、また女性研究者としての、だ」と思ってしまった。依頼頂いたのは、「院生時代以降、どんなことに悩み、どんなことを考えて研究者の道を進んできたのかについて」ということなので、それとは少しずれてしまうかも知れないが、何が「あ、また」なのかということは、女性研究者としてやっていくことと大きく関わらと思うので、その話をしようと思う。

まず、自分自身のことを少し説明すると、京都大学の農学部・農学研究科で学生時代を過ごし、その後、金沢大学自然科学研究科と鳥取大学乾燥地研究センターで博士研究員、いわゆるポストクのポジションを2つ経験した。現在は、情報学研究科社会情報学専攻の生物圏情報学講座で准教授を務めている。この研究室は様々な生物を対象とした研究を行っていて、特に野外で調査をしてデータ収集を行うことが多いのが情報学研究科の中でも他の多くの研究室とは違うところだろう。私自

身も国内外のフィールドで生物の調査をしている。この研究室の助手として採用されたのが2004年、その後助教に称号が変わったり、准教授に昇任したり、と立場は変わったが、同じ研究室にもう12年もいることになる。

学生・ポストクでいた間に、自分が「女子」学生・「女性」研究者である、ということを強く意識したことがあったか？今考えると、実はあまりそんなことはなかった。「女性」研究者を意識したり、「女性」教員としての意見や貢献を求められたりするようになったのは、情報学研究科に当時唯一の女性教員として着任してからだ。

学生の頃は、周囲に普通に女子学生・女性教員がいたこともあって、女性の比率がどれだけか、あまり問題にしたことはなかった。ところが教員となってからは、研究科全体で100人を超える教員のうち女性は現在3名、女子学生の比率も12.5%と京都大学全体での比率の半分程度という現状を事ある毎に意識することになる。まず、着任してすぐに研究科のハラスメント相談窓口担当に。また、女子学生・女性教員が少ない状況の改善を目指して、環境改善について要望を聞いたり、学

生同士の交流をはかってもらったりすることを目的に、研究科として女子学生懇談会が開催される。「トイレの個室に棚が欲しい」「女性専用の休憩スペースが欲しい」などここで出された意見から実現したのものもあるし、学生同士が知り合ったことがハラスメント対応につながったといったケースもあった。女性教職員の懇談会もあって、教員が少ないのだから当然出席者はほとんどが職員だが、ここでも環境改善についての意見が聴取される。何だか色々手厚く扱われている。

しかし、予期していなかったのが、女性教員・女性研究者として、一言挨拶をとか、プレゼンをとか、広報的な活動が求められることが研究科の内外、学内外を問わずちよくちよくあることだ。「〇〇で話をして下さる方を探しているのですが、できれば女性を……」というケースもある。要は、看板に出ている男女比を1:1に近づけるため、サンプリング比率は偏っているのだ。

そんなに頻度は高くない。そればかりやらされてるといふ不平不満を言うほどの負担ではない。でも、何度も繰り返していると、疑問に思えてくることがある。これを引き受けることで、本当にこれが現在の、あるいは将来の女性研究者に役に立つのか？もしかして、「ほら、ここには女性もちゃんといますよ」というトークンになってしまったら、逆効果になりはしないだろ

うか？それよりも、「女性研究者のため」を目指していいのか？

おそらくこんなことを言えるのは、女性研究者・女性教員が現在よりもっと少なく、想定外としての扱いあるいは反発があった頃に、その中でもやってきた方がおられるからだと思う。男女共同参画推進センターのように、組織として状況を改善しようとしている方達の努力もある。また、研究だけでなくどんな分野でも今問題になっている、結婚・出産・育児と仕事をどうやって両立させていくのか、ということについて、たまたま私個人が今のところ大きな問題を抱えていないということもあると思う。

それでもやはり、最終的に目指す方向は、『女性』といちいち言わないでいい、女性研究者が「女性として」の意見を求められなくなることではないだろうか。大学院生が性別関係なく研究をしていくために必要な環境整備を軽視する訳ではないし、将来大学院生になる人たちを含めて大学や学界の外に向けてメッセージを発する必要がないと考えている訳でもない。ただ、その先を、つまり本来の目的を、忘れないようにしなければ、と思うだけだ。私の仕事は研究と教育だ。研究内容にも教育内容にも、私の性別は関係ない。「女性として」の諸々を引き受けるのは、いつか、「女性」研究者と呼ばれない日が来るのに役立って欲しいからなのだ。



## 桑原知子

(教育学研究科・教授)

### 研究者に「なった」！

私はこの「研究者になる！」のコーナーが好きで、いつも楽しみに読ませていただいている。これまで書かれてきた方たちの多くは、「早くからこの道をめざして、夢がかなった」というより、「思いもかけず今の道に進むことになった」と書かれていて、また、「自分の力というより、他の人のおかげで今の自分がある」と振り返られているのが印象的だった。

ご多分に漏れず、私もまた、こんな人生をたどるとは、夢にも思っていなかった。そして、やはり、恩師（河合隼雄先生）との出会いが今の自分を作っているように思う。

現在私は「臨床心理学」を専門とし、カウンセリングや心理療法に携わる仕事をしているが、高校時代にはこんな領域があることすら知らなかった。高校では理系のクラスにいて、大学は理系を受験したのだが、見事に失敗。高校の恩師は、国語の成績だけが群を抜いてよかった私に「お前は国語の教師になるべく生まれてきたのだ」と言った。結局私は文系に方向転換し、国文

学を専攻する大学生となった。

しかし、自分がなにをしたいのかわからず、また、授業にも興味をもつことができなかった。そんなある日、テレビで「自閉症」のドキュメンタリーを見て、「こんな世界があるのか」と衝撃を受けた。あくる日に図書館でこの言葉を調べて（40年余り前は自閉症などほとんどの人は知らなかった）、「臨床心理学」という言葉に出会うことになる。

私は、これを専門としているらしき大学の先生のところに相談に行くことにした。今でもよく覚えているが、その先生の部屋の前でノックしようとして、私は逡巡し、いったんその場を離れた。しかし、帰り道の階段の踊り場に大きな鏡があり、そこで自分の姿を見た私は、踵を返し、思い切りよく扉をたたいたのである。

その先生は女性で、私が「臨床心理学の道にすすみたい」と言うと、「あなた、結婚もしたいでしょ？ 子どももほしいでしょ？ だったらやめなさい」と言われた。そんな恐ろしいものなのかとちらりと思ったが、さらに食い下がって相談した。そのときに、臨

床心理学を学ぶには大学院まで行かなくてはいけないこと、また、京大では教育学部に行かなくてはいけないことを知った。私は、再受験をして教育学部に入り、臨床心理学の道にすすむことになった。

入学するやいなや、私は意気揚々と自閉症サークルに入り、自閉症の子どもたちの療育に関わり始めた。しかし、うまくいかない。テレビでは45分でも子どもが言葉を話すようになっていたのに（45分の番組だった）、実際には一年やっても言葉を発しないのである。私は絶望し、自分がこの道には向いていなかったのだと思った。

河合隼雄先生の「臨床心理学」の講義も受けたのだが、そのすばらしさを当時は理解できなかった。もともと理系でトレーニングを受けてきた私は、「このような症状にはこのような治療を」というような明快な理論を期待していたのに、それを得られなかったのである。（医学とは違って、心の領域は、より「関係性」を含みこんだアプローチを必要とするため、異なった理論体系をもっている。当時はそのようなことを理解できなかった。）

その後も、実際心理療法に携わりつつも、ずっと疑問は消えなかった。プライベートでも、「結婚して子どもを育てて母になる」という人生を当然のこととして予想していたのに、まったく違う人生をたどることになる。

「教育分析」という、自分自身がカウンセリングを受けて自らのことを考えるトレーニングがあるが、それを私はスイスでおこない、その後何年もかけてやっと、今自分がなぜこの仕事についているのか、そして、このような生き方をしているのかについて、理解するようになってきた。この間、私をずっと支え、導いてくださったのは、河合隼雄先生である。

先日実家の押入れを片付けていたら、小学校のときの文集が出てきた。よくある「大きくなったら」のコーナーで、私は「大きくなったらおんなの学者になりたいです」と書いていた。「おんなの」とついているところに時代を感じる。

研究者に「なる！」と思って今の私があるのではない。いろいろ考えてはいてもそのとおりにはならず、しかし、たぶん人には行くべき道があって、多くの人に支えられながらその道を歩いていくのだろう。私は研究者に「なる！」のではなく、「なった！」のである。



池田 華子  
(医学部附属病院・准教授)

## 人との出会いと研究

私は、“困っている人を助けたい”という純粋な気持ちで、医師になるべく、医学部に入学しました。2回生のクラブの夏合宿で、当時6回生の先輩から、研究室で楽しく実験をしている話を聞いたのが、研究に興味を持ったきっかけです。当時薬理学教室（成宮周教授）の准教授をされていた垣塚彰先生（現在生命科学研究所 教授）は、学生の私にもわかりやすくお話し下り、研究の楽しさを語ってくださいました。“とりあえずやってみたら”と言われ、大学院生のお仕事をお手伝いさせていただくことになりました。当時は、分子生物学で学んでいたようなDNAシーケンスやプラスミド構築、cDNAスクリーニングなどを、行うこと自体が楽しく、実験に夢中でした。その後、神経変性疾患の発症メカニズムの研究を始めることになりました。培養細胞を用いた実験をして少したったころ、蛍光顕微鏡で観察中、とても面白い現象を見つけました。細胞の中に蛍光の塊があって、その細胞では細胞が死にかかっているのです。興奮し

て、垣塚先生にお伝えしたことを覚えていています。その後、1年ほどは本業も忘れて実験をし、論文としてまとめていただくことができました。進路を決める段になり、基礎（研究者）の道を選ぶか、臨床（医師）の道を選ぶか、少し迷った時期もありましたが、自分には研究者として多くの患者さんを助けられるほどに大成できる能力が無いこと、臨床医であれば目の前の患者さんを助けられる可能性があること、そして何より、人（患者さん）とコミュニケーションを取りたい、と思ったことから、臨床医（眼科医）の道を選びました。

眼科医になって数年、患者さんの喜びを共有できる日々に、充実して楽しい毎日でした。臨床系では外病院で2-3年研修をしてから大学院に戻って学位を取ることが多いので、深い考えもなく、当時大学におられた高橋政代先生に相談に行きました。すると、理化学研究所（神戸）の故笹井芳樹先生の研究室でES細胞を用いた網膜の分化誘導の研究に携る人が必要だというのです。今更基礎の研究室でやっていける自信もなく、迷いはありました

が、笹井先生のお話をお伺いし、数年間、また研究を頑張ってみよう、と理研行きを決断しました。もちろん大変なことも多々ありましたが、実験を始めてみると、毎日が楽しく、世の中で自分しか知らない現象に遭遇することの醍醐味を再び味わうことになります。

学位論文を仕上げた後は、滋賀県の一般病院で眼科医として忙しい日々を送っていました。当時の眼科教授から、大学に戻って基礎的研究を立て直してほしい、また、若い女性医師にとってのロールモデルとなしてほしい、とお声かけいただき、ここでもまた散々迷いましたが、教室への奉公のつもりで大学に戻ることにしました。日常診察の中で、治せない眼疾患を何とかしたい、という思いを持っていましたので、神経保護の研究に取り組むことにしました。子供を育てながら、診察をしながら、学生教育も行いながら、の研究は、正直、時間のやりくりが大変で、なかなか論文としての成果出せず、苦しい日々でした。しかし、京都大学の女性支援制度の研究補助を使わせていただき、また、優秀な大学院生たちが頑張ってくれたおかげで、ようやく最近、形になりつつあります。先日、京都大学のたちばな賞（優秀女性研究者賞）をいただきました。時間の制約がある中で、自分のできる範囲で頑張ってきたことを認めていただけたのは素直にうれしいです。

このように、私がこれまで研究を行ってきた、行っていくことができたのは、人との出会いに恵まれたからだと思います。研究に興味を持たせてくれた先輩、研究の手ほどきを下さり、神経保護研究の種を下さった垣塚先生、理研での研究の機会を下さった笹井先生や眼科の先生方、京大に戻るきっかけを下さった眼科前教授…人とのつながりを大切にすること、チャンスをつかむべくアンテナを張り巡らしておくことは、研究のみならず人生の様々な岐路で役に立ちます。そして、もう一つ、私がここまでやってこられたのは、家族、先輩・同僚・後輩を始め、多くの方々の理解と協力があってこそそのものです。日々、感謝の気持ちを忘れずに、少しでも患者さんに還元できるような研究を、これからも続けていきたいと考えています。



## 金光桂子

(文学研究科・教授)

### ただ狂へ

進路を決めたのは高校一年生の時だった。冬の夜空に光るさえざえとした月を眺めながら、ふと「文学部で古典文学を勉強しよう」と思い立った。なぜ突然そんなことを思いついたのか、今となってはよくわからない。ただ、さしたる理由もなくこの年頃にありがちな(?)無常観にとらわれており、明日どうなるかもわからない人生、好きなことをやらねば損だと思ったことは確かである。その先三十年も生き長らえると知っていたら、違う道を選んだかもしれない。

大学院への進学を志した時も、「研究者」という将来像をどこまで具体的に描いていたか、はなはだ疑わしい。ただ大学での学問がおもしろかったから、その楽しい時間を少しでも引き延ばしたかったに過ぎない。とはいえ、修士課程の二年間は決して楽しいことばかりではなかった。研究の難しさもようやくわかってきた頃だったから、お気楽に勝手なことを書いていればよかった卒業論文と違って、修士論文には難渋した。集めてきた資料が、どう

しても一本の線につながらない。ついに修論の提出はほぼ諦めてしまい、ただ興味の赴くままに文献をあさっていた。あにはからんや、その時たまたま見つけたある資料が、すべてをつなぐミッシングリンクだったとは——できすぎた話のようだが、実話である。

かくして無事に修論を仕上げることができ、博士課程への進学も決まった時、真っ先に浮かんだのは「これで三年間遊べる」という思いだった。将来への不安がないわけではないが、今心配しても仕方がない。学生でいられる三年間は、何も考えずに好きなことをやろう。というわけで、進学の決まった次の日から図書館にこもり、作品に注釈を付けることに没頭した。論文を書かねばならないという重圧なしに(書かねばならないのだが)ひたすら作品を読んでいたこの時期は、まさに至福の時だった。

しかし、そんな甘い考えは長くは続かない。その後、縁あってとある大学に雇っていただけることになり、学生の身分を離れることになった。それはもちろん大変ありがたい話なのだが、問題は、勤務先の諸々の事情により次

の年までに博士論文を提出する必要が生じたことである。博士論文なんてまだずっと先の話とのんびり構えていた身としては、焦る以前に呆然とするばかり。その時輩にもすがる思いで引っ張り出してきたのが、かつて没頭して作った注釈である。注釈といっても勝手気ままなメモに過ぎない代物ではあったが、それを読み直し整理し膨らませることによって、なんとか博士論文の体裁を整えることができた。

以上が、私が研究者になった次第である。こう書きつらねてみると、ただ好きなことをやってきただけで、あとは思いつきと開き直りと偶然の産物で乗り切り、たいした努力もしていなければ特に悩みもなかったように見える。いや、たぶんその頃はそれなりに努力もしていたのだらうし、深刻な悩みもあったに違いない。しかし、その辺のことは不思議とあまりおぼえていない。今研究者をめざしている人たち、あるいはめざすかどうか迷っている人たちに対して、私が自分の体験から言えるのはこれしかないかもしれない。みなそれぞれ悩みは多いだろう。しかし、それもいずれは思い出せないほど遠い昔のことになる。だから安心して、今はしっかり悩んでほしい。それと同時に、自分が夢中になって楽しめることを存分に楽しんでほしい。

何せうぞ くすんで

一期は夢よ ただ狂へ  
(閑吟集)

悩んでしかめっ面ばかりしていても仕方ない。「一期は夢」という無常観にあえて共感してもらおうとは思わないけれど、「ただ狂う」＝夢中になって遊ぶことができることは、研究者として必要不可欠の資質であるに違いないのだから。





酒井 章子  
(生態学研究センター・准教授)

## 学校嫌いから研究者に

小学校最初の3年間をごく小規模な海外の日本人学校で過ごしたせいか、ずっと学校が苦手な子供でした。中学校では、服装や持ち物を制限され検査されるのも嫌でしたが、1日やることが決まっっていて、つまらなくても授業に出なくてはいけない、教科書に書いてあるのに板書をノートに取らなくてはいけない、みんなと同じようにしなければならない、というようなことが、いちいち苦痛でした。進学した高校は県内では自由な校風で知られていましたが、嫌いな授業はさぼってばかりで、ぎりぎり卒業しました。母に「今日は学校を休む」というと「じゃあ一緒に美術展に行こう」と誘ってくれ、一緒に出歩いてくれました。

ところが京大に来てみると、好きな授業だけ受けていればいいし、欠席しても誰も何もいわない。人と違っていても、誰も気にしない。おもしろそうな先生がいると研究室を訪ね、調査についていたり、研究手伝いのバイトをしたり、自主ゼミに出たり、中高とは反対に、どっぷり大学に入り浸って

いました。

理学部に入ったときはミクロな生物学の方に興味があったのですが、卒業研究では生態学を選びました。ミクロは競争が激しそうだし、マクロの方が同じ研究室でもみんなばらばらの材料を研究していて、自分にはそちらの方があっていそうに思えたからです。バイトでしていたテーマがそのまま卒業研究になり、バイト代がもらえなくなりました。

研究者になると決めて大学に来たわけではありませんでしたが、大学や研究、出会った研究者や大学院生も面白くて、迷わず大学院に進学しました。大学院では、立ち上がったばかりのボルネオ熱帯林の調査地に長期滞在して研究しました。指導教員が来るのは2、3ヶ月に一度、あとはたまにファックスでやりとりするだけで、修士最初の1年はまったく研究できていませんでしたが、無知の強さで焦りもせず毎日森を散歩して、今から考えると贅沢な時間だったと思います。

学位取得後は、パナマのスミソニア熱帯研究所に2年間滞在しました。その後、特別研究員、筑波大学を経て

生態学研究センターに助教授として戻ってきました。

研究でも私生活でも、大きな転機が30代後半にありました。研究での転機は、総合地球環境学研究所（地球研）に異動し、研究者約70名が参加するプロジェクトの副リーダー、リーダーを務めたことです。ずっと基礎生物学としての生態学を研究していたのに、環境問題をテーマに、しかも文系研究者とも一緒に学際プロジェクトをすることになったのです。私生活は、そのプロジェクト期間中に結婚し子供を二人授かりました。二回目の産休は、リーダーとして受けなければならないプロジェクト最終評価、京都大学への再異動と重なりました。つらい経験もありましたが、周囲の方々がたくさん助けていただきました。

それまでは興味の赴くまま研究をしてきましたが、この転機に、これからの限られた時間で自分は何をしたいのか、じっくり考えるようになりました。生態学では、リモート・センシングから分子生物的手法、データ解析手法まで、どんどん新しい技術が導入されています。でも、自分にはなんにも技術はない。頭が切れるわけでもなく、フィールドワークに長けているわけでもない。悩みは多くまだここに書けるような形にはなっていませんが、少しずつ前には進んでいると思っています。

最後に、このごろ思うこと。ひとこ

ろより、女性研究者を増やそうという配慮や、育児・出産に関する制度の整備がなされるようになりました。しかし、社会全体でも研究の世界でも、育児は女性がするもの、リーダーシップは男性がとるもの、といった役割分担の刷り込みはまだ強く、日々再生産されています。二人の息子がしているテレビでも、戦隊モノのリーダーはいつも男です（チームの女性比率は若干あがっているようですが）。自分の意見を主張するのは女性らしくない、といった刷り込みが、国際ランキングで低迷する日本のジェンダー・ギャップや、科学者になりたいと思う小学生の男女差の一番大きな要因ではないか、と思います。定説や常識を疑って新しい発見をするのが研究者ならば、研究者は他の人より少しはこの刷り込みから自由なはず。そのような刷り込みを減らしていこう、という発信も、社会における研究者や大学の役割ではないでしょうか。



## 北島 薫

(農学研究科・教授)

### 大きくなったら何になりたい？

今年の初め、男子のなりたい職業の第1位は、野球選手やサッカー選手を超えて「学者・博士」だという某調査の結果が報道されました。そのとき、「女子は？」とか「なぜ男子のなりたい職業は報道されるけれど、女子のは報道されないのだろう」、など、ムカっときました。この原稿を書くにあたり調べたら、小学校6年生までが対象のこの調査で女子の第1位は「食べ物屋さん」で、「学者・博士」は9位までに入っておらず残念です。私は、多分小学校の高学年ごろから、「人の能力は、男女の違いよりも個人差の方が大きい」という考えをはっきりもち、科学者になりたいと思っていました。ですから、私が研究者になるに至った根源は、さらに前に遡ります。

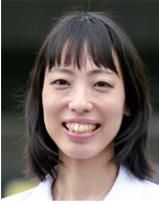
私の父は石油化学の技術者で、母は高卒で英文タイプを学び、二人は高度成長期の瀬戸内海の大コンビナート建設時代に職場で知り合いました。母は結婚後退職し専業主婦として、子育てに専念しました。同じ年に社内結婚などをしたカップル約40組ぐらいが

揃って写っている記念写真があり、その人たちの子供たちと社宅で一緒に遊んで育ちました。ただ、「私も入れて」と、遊んでいる他の子供たちに自分から言い出せず、誰かが声をかけてくれるまでそばに立ってみている子供でした。ところが、小学校にあがると、「勉強はとても面白く、自然にできてしまう」、ということが判明し自信がつかしました。両親（もちろん、仕事で夜遅くにしか帰らない父ではなく多くの場合は母）がたくさん本を読んでくれたのが、学力の下地になりました。小学校の高学年になる頃に、京葉コンビナートの建設のため父が転勤になったので、千葉の市原市に引っ越しました。その頃は、田んぼだらけの田舎で、学校の帰りに収穫後のつるに残っているえんどう豆を摘んで家に持って帰るのがとても嬉しかったのを覚えています。中学受験とかには縁遠い環境で、親から「勉強しなさい」、と言われた記憶が皆無です。成績は体育以外はダントツでしたので、「女子だから」というような制限をかけるアホな大人もいなかったのだと思います。授業中は退屈してノートの余白に落書きばかり

してました。数学などは最初の2ヶ月ぐらいで教科書を自習してしまっていたので、先生の許可のもと参考書の問題を解いてました。この数学の先生は担任だったのですが、卒業前に「普通の人になるな」と言ってくれました。多くの男子からは補導で厳しいと怖がられていた男の先生です。一方、化学担当の女の先生は、「科学者になるのはいいけれど、化学はやめたほうがいい」と言いました。危険な薬品を扱う事もある分野は将来子育ての可能性もある女性にはちょっとね、というような説明でした。これには内心反発しましたし、今でも女の先生がそのような考えだったことが残念です。いずれにせよ、私はその頃には、生物学者になることを決めてました。

高校は男女比が1:1の進学校でしたが、運動音痴に挑戦すべくテニス部に入ったり、古典クラブで万葉集を議論したり、おしゃれな東京女子の多くとはどうもソリが合わない以外は楽しかったです。私が東大に入ったのは、女子新生の総数が初めて200人を超えたという年でした。女子トイレの数が少なくて、講義と講義の間の休憩中に走り回ってました。男子のほうが話が会う人が多い、ということに気づけて大学は謳歌しました。私自身、女性差別の壁に直面した記憶はあまりありません。でも、数学者になりたかった友人は、「女は数学者にはなれない」、

と大学院の面接で教授に言われて憤慨し別の大学の医学部に進学しました。高校時代から暇があったら大学レベルの解析問題を楽しんで解いていた彼女が数学者になったらどうなっていただろう、と今でも時々思います。私自身は「もし、英語で考えて英語で議論したら違う物が見えてくるのだろうか」、という素朴な疑問からアメリカに留学し、あとは流れに乗って研究者になる道を歩き、29年後に帰国して京都大学に就職しました。研究者になることのエッセンスは男女共通です。「他の人と違うことは長所」、「他の人の嘘を見抜き検証すること」、「他の人の見えないものを見えるようになり、それを説明すること」、というのが私の信条です。あと、私の趣味のひとつは手元にあるものを活用してレシピを開発し、見かけは悪いけど美味しい洋菓子を作ることです。



## 加藤 果林

(医学部附属病院 麻酔科・助教)

### ●思い描いた将来は医師かバレリーナ

私が中学生の頃まで選択肢として考えていた職業は、医師かバレリーナでした。昔の私は体が弱く、長期間学校を休んだり、体育の組体操やマラソン大会に参加できなかつたり……。病院にかかることが多い子どもでした。それに加え、京大の事務員を務めながら家事もこなす母に、家庭をもつ女性が働くことの大変さを聞かされ「ならば確実な資格をとろう。それなら医師だ」と。小学2年生の時には、漠然とそう考えていたように思います。

一方で、その頃から双子の姉妹の影響でバレエを習い始めました。体を動かすことも好きだったんです。そのうちバレエだけでなく、ジャズダンスやエアロビクスなどあらゆるダンスを習いました。とにかく踊ることが好きで、バレリーナになるという将来像を思い描くのも自然なことでした。しかし中学生の時、進路相談で「長く続けられる職業の方がいいのでは」と言われ、第一線で活躍し続けられる医学の道に進むことを決めました。

### ●研修先で見つけた運命の進路

京大医学部に進学するのは、今昔も変わらず男子が8割・女子が2割。男子は灘や東大寺などの進学校がありますが、女子は高校の段階でそこまでの教育を受けられるところが少なく、高校受験の際は進路を決めるのにすごく悩みました。結局、選んだのは通学時間が短く勉強に支障が出ない京都の公立高校。週5日でバレエを続けながら、当時はペンを握る指の皮がめくれるほど勉強しました。大学時代は社交ダンスサークルに入って、ショーのダンサーをしたり某劇団のオーディションを受けたり。医学部の勉強は大変でしたが、そういったことができるのも最後の機会だと思い、いろいろと挑戦していました。

そしてやがて迎えた臨床研修。私たちの時代から、臨床研修期間に複数の科を経験するスーパーローテーション方式が導入され、マッチング制度によって研修先を自由に選べるようになりました。決まった研修先は西神戸医療センター。ここで私は、麻酔についてなら何時間でも話せる！というほど、麻酔科のやりがいに目覚めました。

麻酔科の業務は大別して、手術室での麻酔、重篤患者の呼吸・循環などを保つICU、痛みを取り除くペインクリニックの三つです。手術時には知識と技術と薬剤を駆使して片肺だけを換気したり、一部の神経をブロックしたり、全身麻酔だけでなく下半身麻酔を施行したりします。また緊急時には手術室の司令塔としてチームをまとめます。いつどの科に呼ばれるかわからない上、呼吸のこと、循環のこと、脳神経のこと、薬剤のこと……全部を理解していないとできない。麻酔科医は、職人であり救命のスペシャリストだと思いました。

### ●麻酔科医の現状と女性の働き方

そんな大好きな麻酔科なのですが、慢性的に人手不足なのが実情です。その要因は科としての歴史が浅く認知度が低いこと。手術室外での鎮静依頼を受けるなど多方面でニーズが高まったこと。そして高齢化社会を迎え、3人に1人が悪性腫瘍を患う今、治療の第一選択である手術の数が増加していることなどでしょうか。医学系大学の柱は教育・研究・臨床。私の研究テーマは周術期における感染症制御なのですが、臨床や子育てで限られた時間しかない今、できることを常に心がけています。その一つが「手指衛生の声かけリーダー」。周術時の手指衛生を徹底するという簡単なことで、感染症の

リスクは大幅に下がるということを示したいと思っています。

麻酔科は比較的女性の比率が高い科です。オンオフがはっきりしているので、9時5時で帰ることもできるし、扱う薬剤がシンプルなので、病院が変わっても働きやすい一方で、専門医制度が厳しいため長期の産休育休をとることが難しく、人手不足のため小さな子どもがいても当直を望まれることもあります。手指衛生の声かけ運動のように、今後、少しずつ意識を変えていきたいですね。





## 山根 久代

(農学研究科・准教授)

### ● 周りの影響と消去法で決めた農学部 進学

「果樹の研究をしているの!?!」「よく喋るようになったね!」。島根にいた頃の同窓会に行くと、現在の私によく驚かれる。農学といっても祖父が趣味で畑を作っていただけで、実家が農家というわけでもない。また、人と積極的に関わるタイプでもなく、なんとなく植物が好きで地道に何かに打ち込んでいる。そんな子どもだったから、自分は間違いなく文系より理系。でも人の命を預かる仕事は怖い。そんな私が、自分に向いていることで人の役に立つには……。そう考えたときに、出した答えが農学部への進学でした。

私の地元には高校が一つしかなく、大学を目指す人は文系・理系問わずそちらの理数科に進学するという環境でした。そのため、クラスに女子はそれなりにいましたが、理系大学を目指していたのは二人だけ。私自身、特に志望校はありませんでしたが、2・3年時の担任の先生が熱心に偏差値の高い学校を勧めてくださったこと、そして周囲の志の高い生徒につられる形で京大を受験しました。今思えば、私の人

生はその時の担任の先生が形作ってくださったのかもしれませんが。

### ● 「面白いこと」に打ち込んだ学生時代

大学に入学してからは真面目に学業に専念しました。と、言いたいところですが、実は学生の特権!とばかりに、それまで縁のなかったアーチェリーに打ち込んでいました。「アーチェリーは大学に入ってから始める人が多いから、頑張ればインカレに出られるかも」という言葉に誘われての入部でした。波は激しかったです。実際にインカレに出場し、関西の新人戦で2位という成績を残せたのは自分でもびっくり。研究に没頭し始めたのは、4回生の春に部活を引退してからでしょうか。

その頃の農学部は、今とは違う細分化された学科体制で、研究室も作物別に分かれていました。私が入ったのは作物生産を研究する農学科。それぞれの先生が稲・野菜・果樹と、専門の作物を詳しく教えてくださり、学生実験では実際に対象作物に触れて育てて研究していました。当時は見聞きするも

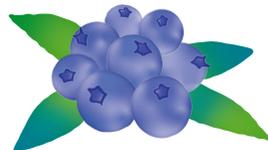
のがすべて楽しくて仕方なく特に果樹園芸は育てる環境が身近になかった分、より魅力的に感じ、私のやりたかったことはこれだ！と自分に合っていると確信しました。

研究者になることは悩みましたが、結局決断した理由も、修士の時に与えられたテーマが先端的で面白かったから。毎日遅くまで残って実験を繰り返して、学会で発表すると皆さん熱心に聞いてくださるので、「もう少し頑張ればもっと興味を持ってもらえるかな」のその繰り返しでどんどん研究にのめり込んでいきました。

### ●女性研究者としての損得は半々。自分らしい道を進んで

現在は、10年前から行っている植物の休眠現象の解明に加え、消費者をターゲットにした、より美味しいブルーベリーとライチを作るための研究も行っています。果樹を相手の研究は、きちんと育てるところから始めなければいけない上、結実するその時に何らかのデータを得なければ、また1年後を待たなければいけない。そういった意味では、論文の本数で研究の進展を測られると厳しいものがあります。また、他分野の女性の先生方も同じだと思いますが、子育てをしていると時間の壁にぶつかることが多々あります。現在は「自分がやれることをやる」と割り切っていますが、研究を主とした

い女性研究者の場合、講義の量をオフィシャルに減らすなどの対策があってもいいのかもしれませんが、研究助成制度のなかには女性研究者向けのものがあつたりも思うので、結局、研究者の性別によるメリット・デメリットは半々でしょうか。楽天的かもしれませんが私はそのように考えます。最近は「ノケジョ（農学系女子）」という言葉が巷で囁かれるように、農学の道に進む女子は増えてきています。自分の価値観を大切に個性を生かし、周りに惑わされず、どんどん目指す道を進んでもらえたらと思います。





## 帯谷 知可

(東南アジア地域研究研究所 社会共生研究部門・准教授)

### ●研究者につづく道でもあったシルクロード

幼い頃の自分が、大人になって研究者になっていると知ったら、きっと驚くでしょう。なにしろ小学生時代は水泳やマーチングバンド、ポートボールなどのクラブ活動をして、常に動きまわっている子どもだったので。中高生の時もテニスに打ち込んでいたので、研究の道に進むとは思っていませんでした。ただ、小学校低学年から英語教室に通いはじめたことがきっかけで外国語に興味をわき、通訳など海外と関わる仕事に就きたいと思っていました。

多感な高校時代、井上靖の西域小説などをよく読み、シルクロードに憧れました。初めてNHK特集のカメラが敦煌などの遺跡に入った時期とも重なりました。そして外国語大学に進学し、ロシア語を専攻。最初はスペイン語を選択するつもりでしたが、実はやむなくロシア語になってしまったのです。今の専門からするとこの選択が重要な分かれ道でした。

ロシア語を専攻する学生のなかには、ロシア文学を愛読している人や社会主義思想に興味をもっている人もいまし

た。私はほとんど事前の知識なく勉強を始めましたが、ロシア語の美しい響きに惹かれました。そんな時に授業でプラトーフの小説『粘土砂漠』が取り上げられ、ソ連の中の中央アジアに関心を持ちました。ロシア革命後に中央アジアで起こった反ソヴィエト運動「バスマチ運動」を卒論のテーマにしました。

### ●ソ連解体後の激動の時代にキャリアも動きだす

もっと深く中央アジアのことを学びたいと思い、1年間の研究生時代を経て大学院へ。この時期にイスラーム世界からの視点で中央アジアを考えるアプローチや、中央アジアの言語で書かれた史料を使った近現代史研究といった新しい動きがでてきたことに刺激を受け、本格的に中央アジア近現代史研究を志すことになりました。ソ連解体という激動の時代を目の当たりにしたことも大きな影響を受けました。ソ連解体後、ロシア以外の旧ソ連地域に関心が集まり、まだキャリアもないのに事典項目執筆などの仕事をさせていただくようになり、その後ウズベキス

タンに日本大使館ができる、専門調査員として勤務することになりました。当初は政治経済情勢分析の辞令をもらいましたが、当時の大使から文化広報担当に任命され、試行錯誤しながら日本文化紹介事業の運営などを行いました。この時に築いたネットワークが今の研究活動にも役立っています。

任期を終えて日本に戻ってからは、国立民族学博物館地域研究企画交流センター（当時）で、グローバルな課題についての共同研究のオーガナイズなどを担当しました。こうした経験を積むなかで、ウズベキスタンが独立後の国づくりの過程で直面している課題と、ロシア革命後の中央アジアの社会主義的近代化の歴史が重なり、現在の研究スタイルができてきました。

### ●研究者も生活者であることを大切に

現在は、ウズベキスタンをはじめとする中央アジア諸国のモダニティの形成過程に関心があります。特に近年は、女性がまとうイスラーム・ヴェールを題材にして、中央アジアにおける女性解放運動の歴史、イスラーム復興と女性、現代のジェンダーの問題などについて調べています。その他にも、ロシア帝政期にロシア人によって編纂された『トルキスタン集成』という希少史料のデータベース化に携わってきました。研究の醍醐味は、断片的な情報や事柄をつなげていき、点から線になる

ことで、何かしらの意味が浮かび上がった時のわくわくするような感覚や大きな達成感にあります。また学生に中央アジアについて話し、自分の興味に引き付けて関心をもってもらえた時も嬉しいです。

女性研究者にとって仕事と家庭の両立は大きな課題です。私も『トルキスタン集成』のデータベース化に取り組みはじめた頃に高齢出産と、ほぼ一人での育児を経験することになり、最も育児が大変な時期は、フィールドで飛び回るよりは子どものそばで、と切り替えました。職場の温かい雰囲気や育児経験者のサポートのおかげで、研究活動を続けることができました。現在は当研究所の男女共同参画推進委員会に参加して、小さな子どもをもつ教職員が無理なく働ける環境づくりに努めるとともに、男女共同参画のための広報活動にも取り組んでいます。育児支援も年々拡充されてきているので、研究と家庭の両立は確かにとても大変ですが、大変な分、豊かでもあるので、恐れずチャレンジしてほしいです。「研究者も生活者であることを大切に」というある先輩女性研究者の言葉を私も大事にしたいと思っています。



## 松尾寛子

(学生総合支援センター・特定准教授)

### ●思ってもみなかったキャリア

北海道大学大学院修了後、株式会社リクルートに入社し、人事システムや能力測定、人材育成に関わっていました。その後、東京から関西に拠点を移し、京都大学大学キャリアサポートセンター（当時）で7年間勤務。高知大学に教員として赴任して2年間を過ごした後、京都大学に戻り、学生総合支援センターで京大生のキャリア教育や就職支援を担っています。キャリアのスタートが民間企業であることや「学生総合支援センター」という耳馴染みのない部署にいるため、「研究者」のイメージからは少し離れているかもしれません。私自身、数年前まで大学教員になるとは思っておらず、大学で学生を前にしていると、今も不思議な気持ちになることがあります。

### ●学生時代は大規模データの分析とスノーボード

学生時代は行動計量学を専攻していました。専攻希望調査の時点では、認知系の心理学を選択するつもりでしたが、研究室説明会で急遽変更。今もご指導いただいている大津 起夫先生

(現・日本入試センター 試験・研究統括官)との出会いでした。配属後、ほぼマンツーマンのご指導のもと、学部・大学院を通じて“*The Bell Curve*”の再分析を行いました。数十万件のデータを分析し、人々のどんな属性や経歴が高収入に結びつくのかを探る研究で、社会学では階層研究と呼ばれる分野です。この時期に統計分析の基礎を学べたことにはとても感謝しています。

研究と並行して熱中したのが、スノーボードのアルペン競技。「せっかくなら北海道らしいスポーツを」と始めたところ、たちまち夢中になり、社会人チームに参加していました。インストラクターの資格も取り、遠征費用をレッスンで稼ぐ「雪山サイクル」で、学部生時代は一年の半分以上をスキー場で過ごしました。完全燃焼したせいか、北海道を離れてからは一度もスノーボードはしていません。

### ●点と点がつながっていく楽しさ

大学院修了後、入社したリクルートでは出版事業を希望しましたが、配属は予想外の人事システムコンサルティ

ング部門。希望の配属ではありませんでしたが、学生時代のデータ処理の経験からデータベース構築やプログラミングに難なく馴染め、自分の中では「点」であった大学の研究が今の仕事と「線」で繋がった感覚がありました。その後、適性検査の開発や人材育成コンサルティングにも関わりましたが、統計の知識が応用できたり、システム構築の経験がサービス開発のきっかけになったりと、点と点が繋がることで仕事を楽しく続けられたように思います。

キャリア理論の中で「計画された偶発性」という概念があります。ごく簡単に言い換えると「キャリアは用意周到に計画して形成されるものではない。大半が予期せぬことの積み重ねでできている」という考え方です。私のキャリアは計画性なし。これからも偶然起こることを楽しみつつ、歩んでいきたいと思っています。

## ●研究テーマは日本の新卒採用と大学生のキャリア形成

日本の新卒採用は「大学生が同じ時期に、一斉に、就業後の業務を指定されずに就職活動をする」という点で他国と異なります。また政府や大学、企業が採用活動にルールを設ける動きも特徴的です。最近話題になっている「守られない」採用活動解禁日の設定は100年近く前から幾度となく繰り返

返されてきています。これらの制度がなぜ日本社会に深く根付き、継続されているのか、そして、この制度のもとで就職活動をした大学生のその後のキャリア形成はどうなっているのかを明らかにしたいと思っています。その上で、日本の就職・採用活動の改善に向けて何らかの提言ができれば本望です。

近年、女性が牽引する社会運動が世界的に大きな影響力を持ってきています。こういった運動とその影響力を見るにつけ、自分に課された責任を果たすことについて考えます。多様性を認め合いながら一人ひとりがいきいきと働ける社会の実現に貢献したいと思っています。





竹内里欧  
(国際高等教育院・准教授)

●人生で出会った様々な本が研究を押し進める力に

私が研究している分野は社会学です。一言で説明しようと思うと難しいですが、社会が抱える問題や現象、人間の社会的生活などを幅広く追究する学問なので、教育や文化、歴史に産業と、いろいろなアプローチの仕方があります。

私には二つ研究テーマがありまして、一つ目は、ナショナリズムと「文明化」の関係というテーマで、博士論文では、西洋のまなざしの中で近代日本社会がどのように自画像を描いていったかということを分析しました。たとえば、注目した現象として、新渡戸稲造による「武士道」のブームがあります。新渡戸は、1899年に『武士道』を英語で出版し、「文明化」された「東洋の代表者」たる日本にふさわしいジェントルマンシップとして「武士道」を再構築しました。彼は何故この本を書いたのか、そこにはどのような戦略がひそんでいたのか、また、その戦略にはどのような陥穽や危うさがあったかということを分析しています。これに関しては、芥川の有名な小説

「手巾」が研究を押し進める力となりました。「手巾」には新渡戸をモデルにした人物が戯画化して描かれているのですが、物語の最後、主人公は得体の知れない「不安」にとらわれます。この、芥川が暗示した不安は何かという謎が、分析をする上でのヒントともなっています。

そして、二つ目は、大正～昭和初期頃の家庭小説・佐々木邦の作品分析です。文化社会的な見地から、描かれた子どもや家庭のイメージを読み解いています。実は、佐々木の作品に出会ったのは小学1年生の時です。父が文系の研究者だったこともあって、家の本棚にはいろんな書籍があふれていました。そこにあった1冊が佐々木の『苦心の学友』でした。リベラルな雰囲気、上質のユーモアなど、子どもながらも面白くずっと心に残っていました。大人になって評伝的な興味から調べてみると、ユーモアに満ちた家庭小説を生み出しているのに、本人の方は冗談が苦手な真面目な性格であり、厭世的な考えや人間観を抱いているなど、背景が複雑であり、いつかもっと深く掘り下げたいと思っています。

## ●日々迷いつつ

とはいえ、昔から研究者になると決めていたわけではありません。文学部に入學すると、同級生には、韻を踏んだ美しい英文をすらすら書く学生、西田幾多郎の哲学についてとうとうと話す学生など志高く才気にあふれる学生もちらほらいて、こういう人こそ文学部向きなんだろうなあ、私みたいなのが入るところではない、と思いました。しかし、そうした中でも、友達の影響や背伸び心で、いい本や映画、音楽などをたくさん教えてもらって味わう時間がふんだんにあったのがよかったです。

研究の過程では迷うことが多かったのですが、一つの転機となった本は、橋川文三の『日本浪漫派批判序説』でした。自分の実存的関心と思っているものが、実は非常に世代や社会的なものに拘束されているという発見、文学的潮流と社会の接点、暗い部分に目配りした人間観など、大いに刺激を受けました。そして、それまでどちらかというと小説などをただ面白く読んでいたのが、分析的思考の面白さに大変スローながら思い至りました。

(私自身、目指している途上にあるのですが) 研究者になるためには、もちろん努力が必要なのですが、必ずしも努力が報われるということはありません。誰にでもおすすめできるとはいえないところがあります。現在、個人

的には子育て中で、時間的制約が厳しく悩みつづきます。まわりの優しさに甘えつつ研究者としていさせていただいているので、感謝を忘れず、そこのできることを一生懸命やらなくてはと思っています。





## 船 曳 康 子

(人間・環境学研究所・教授)

### ● 恩師の言葉を胸に刻み、我が道をひたむきに歩む

人から10年遅れをとってもいいから、我が道を進みなさい。その代わりに、先を争ってはいけない——。人生の指針となったのは、入局先の教授が掛けてくれた、この言葉でした。当時は今と違って、6回生の秋に所属する診療科を決めなければいけなかった時代。私は、その時点で人生の方向性を絞るのではなく、もう少し経験を積んでからにしたい。そして家庭も大切にしていきたいと考えていました。その希望を理解し、尊重してくださる教授に出会えたことは、とても幸せなことだったと思います。

それからはまさに我が道を選択し続けてきました。大学院では認知症の研究をしたのですが、進めるうちに“忘れる”の前段階である“覚える”から取り組みたいと思い、アメリカへ留学。小鳥を育てて歌を覚えさせ、忘れるまでの経過をみることで、ライフスパンを通した認知機構の研究を行いました。すると、思った以上に“覚える”こと、つまり発達の段階が大変という事に気が付きました。加えて、留学中に出産

を経験したことで、子どもたちを取り巻く日本とアメリカの環境の違いにも興味を持ちました。アメリカは親や子に対する社会支援システムが整っていて、ハンディキャップのある方々への理解や配慮がおこなわれている。それに対して日本はどうだろう？と。その時の疑問が、今、私が行っている研究の出発点。認知症の研究者が増えたこともあり、帰国したらこのテーマに取り組もうと決意しました。

### ● 転身に見える選択。一つずつが繋がって今がある

ただ、一口に子どもの社会支援といっても、関わり方は多岐に渡ります。例えば行政でできることもあるし、教育学の目線からできることもある。私が思う重要なポイントは何だろう？と考えた時、出した結論は“心”、中でも精神医学からのアプローチでした。一人ひとりの最も大変な状況を理解する必要があると考えました。さらに、発達障害など何らかの気がかりな特徴のある子ども、または病気の子どもをもつ親御さんは、必ずといっていいほど将来の心配をされています。その悩

みに向き合おうと思ったら、大人になった時の像を理解していないとなりません。子どもの支援だけ考えていると、「大人になったらもう知らない。」ということになりますから。精神医学を一から学びなおし、成人のころの支援や診療もしっかりすることで、現在の子どもの支援に役立てようと考えました。

私が最初に所属したのは老年科。帰国してから精神科に移り、児童精神医学を専門とし、そして今は人間・環境学研究科で研究しています。周囲の人からはよく「なぜそんなに転身しているの？」と聞かれるのですが、私の中では転身ではなく、ひと繋がりなのです。認知症を研究したから、それをヒントに子どもの社会支援の枠組みの発想につながり、それを実現するために精神医学を学んだから今がある。

現在は四つのプロジェクトを掲げていますが、メインで取り組んでいるのは、発達障害の人を支援するシステム作りや、自閉症における脳内メカニズムの解明。この研究によって、医療なら医療、社会なら社会、教育なら教育と、それぞれが単独で支援している現状を見つめ直し、総合的な支援体制を構築すること。そして、自閉症をはじめとした人への理解を深め、誤解や勘違いから起こる日常のトラブルを防ぐことを目指しています。

研究は大きな花火を一発打ち上げて、

太く短くやればいい、というものではありません。細くてもねばり強く続け、長期的スパンで真髄に迫ること。それが本来の研究の姿であり、大切なことだと感じています。例外が多く、明確な答えが出にくい分野ではありますが、あきらめずにコツコツと。一人でも多くの人が過ごしやすい世の中を作るために……。





## アスリ チョルパン (Asli Colpan)

(経営管理研究部・教授)

### ●勉強が好きだったから来日の機会に繋がった

「勉強をしなさい！」。親御さんにそう注意された経験のある方は多いのではないのでしょうか。私の場合はその真逆で、子どもの頃は家に帰って宿題をするのが一番の楽しみ。時には「何時まで勉強しているの！」と怒られるような、珍しいタイプの間人でした。中でも得意だった科目は、数学、化学、物理学です。ロジカルに考えれば答えを導き出せるところに面白く没頭しました。

その志向は成長しても変わらず、大学では繊維工学を選びました。工学の中でもなぜ繊維？と聞かれると、当時は人気分野でしたし、また今から考えると恥ずかしいのですが、好きだった子の希望進路だった、というのが理由の一つでした(笑)。きっかけは不真面目でしたが、入学してからは真面目に勉強を頑張りました。そのおかげで、成績優秀者だけが選ばれる、日本の繊維工学関連企業へのインターンメンバーになることができました。

実は、これが私にとって最初の海外体験でした。一定期間過ごしてみると、

電車は時間通りに来るし、やるならやる、やらないならやらないとはっきりしている。ある意味完璧なシステムが出来上がっている社会で、完璧を求める私の性格によく合っていると思えました。その後、一度はインターン先の企業に就職することを希望したのですが、働くなら日本語ができないとダメと言われ……。まだ勉強したい気持ちもあったので、奨学金を申請して学校に通い、もう一度日本に帰ってくることを決意しました。そしてリーズ大学の修士課程、京都工芸繊維大学の博士課程に進むことを決めました。

### ●自分で掴んだ経営学の道。常に論文の先を見据えて

経営学を勉強し始めたのはリーズ大学にいた頃です。私がいた工学のクラスは学生数が少なく、そのうえ授業内容はすでに知っていることが多かった。そんな中、もっと新しいことを学びたいと思っていた矢先に、経営学と出会いました。経営学のクラスは学生の数も多く、みんなが競い合って勉強していた環境も肌に合って、途中から

はすっかり経営学の虜になりました。どちらの大学も奨学金は工学で申請していたのですが、リーズ大学の時は熱意で認めてもらい、京都工芸繊維大学の時は、学内に経営学の研究科がなかったので、工学研究科に所属しながら京都大学の特別研究員になる。という形にたどり着きました。

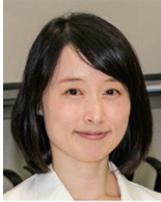
現在、研究しているテーマは、「多角化したビジネス・グループの持続性：理論的および実証的考察」。簡単にいうと、企業戦略と企業統治です。多角化するビジネス・グループ—例えば自動車を造ると同時に、ファイナンスや化粧品の分野も手がけている企業が、どういう成長の仕方をしたのか。なぜそれほどまでに多角化したのか。ということ、企業史から考察したり、企業統治のあり方がその会社の業績とどう結びついているのかなどを、計量経済学的手法を用いて分析したりしています。

経営学というのは、企業活動全般を研究する学問です。その性質的に論文を出して終わりというわけにはいかず、企業に行って発表したり、社外役員として結果を出したりするなど、何らかの形で企業に影響を及ぼすところまでが一連のプロセスなのだと考えています。また、私は海外のビジネス・グループを中心に研究しているので、国際的なトップ雑誌などで成果を発表することも、常に心がけている姿勢の一

つです。出版した書籍がハーバードビジネススクールから認められて2016年から1年間、客員教授として迎え入れられたことは、とても嬉しかったです。

社会の問題なのか、女性の考え方によるものかはわかりませんが、日本は女性研究者が少ないと感じています。私自身が今そうなのですが、働きながら子育てをするというのは確かに大変です。しかし、高等教育で女性が自分の役割を持つこともまた、大切なことだと思います。





## 三宅 可奈江

(医学研究科・特定助教)

●幼少期の経験から医師を志すことに  
自身の半生を振り返ると、私にとって「病氣」は常に目の前に立ちほだかる大きな壁でした。幼少期の頃に大病を患い、長い間通院・入院を繰り返す日々。また、医学研究者であった父が病氣に倒れ、若くして他界しました。家族にとって何ともし難い苦難をもたらすのが病氣であり、看護する母や家族の心配・不安は相当なものであったと記憶しています。

ただ、幸いにして、私の病は医療の進歩のお陰で劇的に改善するのです。高校生の時に私の人生の導となる医師に出会い、当時最先端であった治療を受けることができました。手術の可能性もあった状況でありながら、非侵襲的に半日で済んでしまった治療。医療技術の進歩の恩恵を身をもって感じた瞬間でもありました。

医療には限界もあるが、絶望を希望に変える力がある。そう確信した私は医師になることを志し、そして主治医の出身であった京都大学を目指すようになりました。

地元の岐阜県の公立高校を卒業した後、京都大学医学部に入学。そこで出

会った友人達は個性豊かで、とにかく刺激を受ける毎日でした。医学部100人中、女子は約1割のマイノリティーでしたが、お互いを尊重できる関係で、学年全体も和気藹々とした居心地のよい場所でした。部活動はバトミントン部を選択。そこで、平日日中も部活に励む当時の京大らしい大らかな精神を学びました。

### ●研究テーマは画像診断

現存する最適な治療の恩恵を被るには正確な診断が大前提です。ですが世の中には多様な疾患があり、同じ疾患でも個人によって表現型も程度も様々なため、実臨床では速やかに正しい診断にたどり着くのはしばしば困難です。私は日進月歩の技術の詰まった画像診断で診断の道を追究することを決意しました。

画像診断はこの半世紀で急速に成長した医学分野であり、今や多くの疾患において主要な診断手法となっています。放射線科医は患者のマネジメントを支える縁の下力もちとして重要な役割を担います。

私は医師となった最初の年から臨床、

研究の両側面から画像診断に向き合ってきました。不器用な自分が両者を追求するのは平坦な道りではありませんでしたが、随所随所で様々な方から温かいご支援や刺激を頂き、その方針は変わらず今に至っています。これまで従事してきた研究の中で主なものに乳房専用PET装置の研究がありますが、米国スタンフォード大学への留学、そして核医学会での国際交友を深めるきっかけとなりました。

スタンフォードでは、研究業務に励ませて頂いたのはもちろんのこと、日本とは違う多様性のあるライフスタイルに大変感銘を受けました。家族構成も仕事のあり方も人それぞれ。お互いが多様性を認め合い、人との違いはidentityとして大切にする文化を感じました。米国の文化に引っ張られるように我が家も家族で行動する事が増え、どれだけ忙しくても個人や家族の存在を大切にする人生の在り方を学ぶ機会にもなりました。

### ●希望と夢と好奇心を持つこと

日本に帰ってから第2子が生まれ、今は臨床・研究・家事育児で多忙な日々を送っています。正直、全てをこなすのは大変で、疲弊してしまうことも多いですが、それでも前を向けるのは、やはり芯となる信念があること、そして周囲の助けのお陰だと思えます。職場や家族の理解と協力があつての自

分だと、日々痛感しています。最近は子どもも大きくなり、労いの言葉をかけてくれるようになりました。一緒に過ごせる時間は短いですが、日々の成長が本当にありがたく思います。

これから社会に羽ばたかんとする女子学生の皆さん、選択肢が多くなったようで、まだ多様性の未熟な日本社会では、岐路に立たされた時にどの道を選択すべきか迷うことも多いと思えます。そんな時は自分の信念に耳を傾けるのが一番ではないでしょうか。マズローの欲求5段階説によると、人間の最上位の欲求は「自己実現」だそうです。なりたい自分に向かってなら不思議と力が湧いてくるでしょうし、自己実現まで達成できたならばこの上なく満ち足りた幸せな人生になるかもしれません。私の周りにも沢山いますが、夢に向かって絶え間ない努力を積み重ねている人は素敵ですよ。

私の場合の自己実現は、家族全員が元気で、放射線科医として臨床も研究も頑張りたいという欲張りなものです。これからも医学の希望を現実にするべく精進していきたいと思っております。



## 小田 裕香子

(ウイルス・再生医科学研究所・助教)

### ●調べること、実験が好きで研究者に

大学時代を過ごした京大農学部。そこは実習が多く友達と一緒に参加することが楽しかったことが思い出され、ゆったりと過ごした学生生活でした。そんな中でレポートを書くために調べものをするプロセスが好きで「研究をもう少し本格的にやってみたい」と思うようになり、大学院は理学研究科を受験しました。

大学院（永田 和宏教授）に入学してからは、新しいことばかりでとても刺激的でした。実験をすること、また先輩方と話をすることも楽しい毎日でした。大学で研究を続けるか就職するか、という何度か訪れる分岐点では、そのたび企業へ就職する迷いがありました。将来への不安から来る迷いでしたが、当時、企業のインターンに参加してみて、自分の将来は結局自分で切り拓くしかないと感じ、それならば自分の考えたことを自由に表現できる大学での研究に魅力を感じました。そういう大小の選択の積み重ねがあって今の道を進んでいます。

### ●もがき続けた先で見つけたもの

大学院時代途中からポスドク1年間は森 和俊教授（理学研究科）でお世話になり、その間ずっと小胞体ストレス応答の研究をしていました。まさにその分野が大きく発展しつつある盛り上がりの時期に研究に関わらせていただき、幸運でした。その後、月田 承一郎先生が亡くなられた後のタイミングで、縁あって古瀬 幹夫教授（当時神戸大学医学部）にお世話になりました。そこで現在の研究内容でもあるタイトジャンクションの研究を始めましたが、大学院時代と研究分野がガラリと変わったこともあり、テーマをなかなか見つけることができません。クローディンという分子群が見つかった後で、ノックアウトマウスも次々と作成され、やや成熟しきった分野のようにも感じました。やる気や努力が空回りするのが続き、自分自身を責めたり否定してしまったりしたこともあり。研究室の異動のタイミングで、現所属のボスである豊島 文子教授に拾っていただきました。豊島先生の明るい性格とラボの自由な雰囲気の中、クリエイティブなことを考えられる思

考回路に切り替わっていき、ラボで購入している妊娠マウスを使って何かできないかと考えました。真っ先に思い巡らされるのは、散々悩んで勉強したタイトジャンクションの事です。タイトジャンクションがどうやって形成されるのかという問いに迫ることは、大きなチャレンジだとずっと感じていました。タイトジャンクション形成を誘導するような直接のトリガー因子は生体内に存在するのか。あるいはそういったものなど存在しないのか。論文を読み漁っても、こんなクエスチョンそのものがあるのかわからない。それならえいっと、タイトジャンクションをつくらない細胞とマウスの羊膜を共培養する、という雑な実験をしたのがきっかけです。「マウスの羊膜に由来する分泌因子が培養細胞にタイトジャンクションを誘導する」という結果を初めて観察した時、あまりにもびっくりして震えるほどでしたが、同時にこれは何かの間違いだろうとも思い、その後、慎重に慎重に検討を重ねました。石濱 泰教授（薬学研究科）にお世話になり、ペプチドにまみれながら精製に格闘し、石濱研の最先端の質量分析器のおかげでその分子を同定することができました（まさかペプチドが細胞間接着・タイトジャンクションを誘導するとは、夢にも思っていませんでしたが）。これは、私が双子を妊娠し、出産・産休／育休を経てドタバタの育

児と時期が重なったのですが、男女共同参画推進センターの研究補助制度のおかげで研究を進めることができました。

### ●目の前のことに全力を尽くす

自分の研究の話をした後、“夢あるテーマ”と感動してもらえる日が来るなんて、思ってもいませんでした。このペプチドで、もしかすると炎症やがんが治るかもしれない可能性があり、現在薬にするための技術移転の活動を始めようとしています。

双子育児と研究の両立は想像以上に大変でした。しかし、今の環境の中でできることは最大限しているはずだ、と言い聞かせて目の前のことを一生懸命に、日々の研究に励んでいます。先日、大学院時代の恩師である永田先生に「これで10～20年やっていけるんちゃうか」と励ましのお言葉をいただきました。その言葉に背中を押してもらいながら、今の成果を無事に世の中に送り出し、さらに新しくわかってきていることを自分の手で発展させていきたいです。



## 中村 沙絵

(アジア・アフリカ地域研究研究科・准教授)

### ●何でも挑戦する学生時代

父親の転勤で、中学時代に住んでいたインドネシア。スハルト政権が倒れた時期で、大規模な暴動などを経験し、広く世の中の仕組みのことや、自分とは違う生活をおくる人々の考えや生き方に興味を持ったことが研究者を目指すことへの始まりでした。運動も音楽もボランティア活動もしたい！と欲張りな私は、学生時代、女子サッカー部やサンバサークル、大学外のNGOなど課外活動に多くの時間を費やしました。NGOでの活動を通して津波復興支援の一環でスリランカを訪問したことがきっかけで、後にスリランカの全てに魅了され、スリランカ研究で進学することになるのです。

### ●様々な出会いが今に繋がっている

学生時代、忘れられない様々な出会いがありました。胡瓜の光合成をはじめ、植物の素晴らしさを教えてくれる生物学の先生、聖書をジェンダーの視点で読む先生。2人の先生の授業はとにかく興味深く感心することばかりで、何かを追求することはこんなにも素晴らしいことなんだと感じさせられまし

た。また「私もいつかこんな本を書いてみたい」と思うほど感動した民族誌との出会いもあり、いつの日か研究者を目指す自分がいました。

大いに影響を受けることになったスリランカ訪問では、スリランカの人、食べ物、風景、いろんなものに魅せられました。スリランカにまた行きたいという思いと、自分も少し関わっていた津波復興支援についてももう少し考えてみたいという思いから再訪問しました。そこで、とある老夫婦に出会い、みずばらしい格好をしている私に声をかけてくれました。シャワー、トイレ付きの部屋を用意してもらい、なんと毎日の食事までお世話になることに。いつも私のことを気かけ、本当の両親のように親切にしてもらいました。かけがえのない出会いとなり、私自身も彼らのことを「お父さん、お母さん」と呼ぶようになっていました。私にとってその方々との出会いが大きく、「この人たちのことをもっと知りたい」と素直に思うようになりました。そこから、高齢者について研究し、老人ホームの民族誌を書くことに至りました。

出産・育児を経て、卒業できるかどうかかわからない状況の時もありました。産後は所属もなく保活に苦労し、ようやく保育園に預けられるようになったのは息子が2歳のときでした。その間は、両親にみてもらったり、就寝後の時間を使うなどして「とにかく、本だけ出せばそれでいい。研究者になれなくてもいい」と思って博論を書いていました。京大の大学院(ASAFAS)の先生方が支援してくださり、何とか研究者の道を諦めずに来られました。自身の著書を出すことができ、強い意志を持って続けてきてよかった、と今心から感じています。

現在は、スリランカをはじめとする南アジア地域の老い・病い・死とケアをめぐる問題を研究しています。地域のことを相対的・総合的に見て、生態系や地理的な特徴、文化的な特性、社会構造等がどのように関係しているのかという地域研究の視点と、文化をもっている人間の社会的・文化的側面を追求する文化人類学の視点から研究を進めています。

### ●調査に協力してくださった方々のためにも、意義のある研究を

私が心がけていることは、とにかく、現地の人たちに教えてもらったことを一つ一つ大事に理解し、文字にし、忠実に伝えること。遠回りだったとしても、調査に協力してくれた人たちに何

らかの意義ある仕事をする。現地で調査に協力してくれている人たちにとっても、私にとっても、学術的にも大事な問題を探し続けるようにしています。そして、まずは単著を英語にして現地の人たちに還元したい、と考えています。その後はもう一度、長期のフィールドワークをしたいです。

裁量労働なので、子育てもしやすい環境ではありますが、平日のお迎え時間までにできることが限られていて、休日や夜間(子供を寝かした後)などに仕事が集中してしまうこともあります。これが続くと家族も疲れてきてしまうので、ときには「忘れ」、裁量労働だからこそ、オンとオフをちゃんと意識しなければと思っています。また、夫や子どもはもちろん、それぞれの両親、姉家族、近所の方々やベビーシッターさんなど、本当に色々な方々に助けられています。ずっと感謝の気持ちを忘れず、自分のやりたいことを諦めることなくやっていけたら、と思います。スリランカでは、内戦後、コミュニティの社会構造や関係性が大きく変わっている地域があります。そういう場所も含めて、スリランカのことをさらに深く知って、世の中に発信していきたいです。



## 深澤愛子

(高等研究院物質—細胞統合システム拠点・教授)

### ●化学者になって新しい物質を創りたい

科学者のルーツを辿ると、多くの場合が子供時代から自然や科学に触れ…というのが多いですが、私自身は幼い頃は本が好きでインドア派、科学とはあまり縁のない幼少時代を過ごしていました。そんな私が科学者を志した契機は間違いなく高校時代にあります。私の母校は、とにかく生徒の自主・自立性を重んじる学校で、まさに「出ていない杭は打たれる」雰囲気のもと、文化祭などの行事の企画や討論合宿で徹底的に意見をぶつけ合うことで、何事も主体的に考え周囲を巻き込みながら行動する力がついたと思います。理系科目では実験に重きが置かれ、自分たちで実験を計画するチャンスもあり、本当の意味での科学の面白さに触れることができました。次第に、新しい物質を生み出せる化学に魅力を感じるようになり、京大工学部工業化学科を目指すことにしたのは、高校3年生になった頃です。それまで学校行事や部活のバスケットボールに熱中していたため全くの実力不足でしたが、そこから猛勉強し、何とか合格。入学後は、

サークル活動・アルバイト・趣味を謳歌し、試験直前になって勉強を詰め込むという当時の典型的な京大生で、気ままな生活を謳歌していました。

### ●生活スタイルが一変、研究漬けの毎日

そんな気楽な生活が一変したのは、研究室に配属された4回生のときでした。新しい物質を創り出したいという初心を思い起こし、有機合成化学の研究室に飛び込みました。3回生までの実験では、結果が既に分かっている実験を行い基本操作や原理を習得するのに対し、研究室ではこれまで誰も作ったことのない物質の合成に取り組みみます。最初にもらったプロジェクトは、ケイ素どうしの結合をもつ新しい有機化合物を合成し、その性質を明らかにするというものでした。合成の難しさから研究が一向に前に進まず、それまでの生活スタイルとの落差も激しかったこともあり、心身の調子を崩しかけたこともありましたが、でも、研究室の先輩や同期からの玉石混交の様々なアドバイスのおかげで(笑)、「多様な考え方に触れ、自らで考え取捨選択

しながら進んでいけばいい」と思えるようになり、何とか乗り越えられました。その後はとにかく文献を読み漁り、時には研究室の別のグループの先生や近隣研究室の先輩にも自分から議論を持ちかけ、実験を重ねることで着実に解決への糸口を見出し、3年半かけてようやくまとまった成果を出すに至りました。当初は博士課程への進学は考えていませんでしたが、いつの間にか研究の面白さに魅了され進学し、その後大学で研究する道を選択し、今に至っています。私が現在取り組んでいる研究は、革新的材料の創製を目指した新しい有機分子の創出です。優れた光・電子機能をもつ新物質の創製は、持続可能な社会の実現の根幹を担う重要課題であり、かつ材料への応用に直結する可能性をもつため、有機・無機材料問わず世界中で活発に研究されています。私はむしろ基礎科学としての側面に強い興味があります。これまで実現できないだろうと考えられていた未踏物性や機能への挑戦は、科学の常識を覆すチャンスを秘めているからです。もちろん既存の技術の改良に確実に貢献する物質創製も重要ですが、私たちは既に誰かが可能性を示した応用の方向性に囚われず、さらにその先を目指し、ユニークな有機分子のデザインを起点に、合成、機能開拓に取り組んでいます。

### ●今を大切に、そして楽しく

研究者である夫と結婚し、子どもが産まれてからは、今まで研究一色だった生活は驚くほど変化しました。さらに京大への異動に伴い夫とは別居を余儀なくされているので、研究の時間を今まで通りに確保することは非常に困難です。それでも、「研究と育児の両立」や「ワークライフバランス」という言葉には抵抗があります。私にとってワークはライフの一部であり、研究と育児は天秤にかけられるものではなく、一方のために他方を犠牲にすると捉えたくないからです。まずは自分と家族の健康を第一に、あとは完璧を目指し過ぎず、頼れる人やモノには割り切って頼ること。恩師の玉尾皓平先生（京大名誉教授）の言葉である「今を大切に、そして楽しく」をモットーに、その都度全力で取り組むしかないと考えています。今は京大で自分の研究グループを主宰するようになって間もなく、まだ何も大きなことは成し遂げられてはいませんが、これまで誰も思いもよらなかった“不可能を可能にする分子”を創り出し、世界をあっという間に驚かせたい。研究のワクワク感、自分の手でスゴい新物質を生み出した瞬間の震えるような喜びを、学生、研究員の人々と共有し、有機化学、マテリアルサイエンスの新境地を開拓していきたいです。



## 山村 亜希

(人間・環境学研究所・教授)

### ●歴史も地理も大好き。自分にぴったりの歴史地理学。

山に囲まれた中国山地の盆地で育ちました。子どもの頃から知らない土地を「探検」し、その経験をもとに頭の中で地図を作ることが大好きでした。その一方で、学校の科目として好きだったのが歴史でした。身体と頭は地理ですが、気持ちは歴史という感じでしょうか。どちらかを高校生の時点で選べなかった私が、入学後に専門を選べることから志望したのが京大の文学部でした。

受験勉強に苦労して入った京大なのに、人間関係に当初は慣れませんでした。特に要領良く単位を取ることを自慢し、雑学王のように知識や読書量をひけらかす京大生の一部の文化に馴染めず、悩みました。そんな中、1回生の時に履修した、当時の人気授業の一つの「人文地理学」が唯一の救いでした。それは、先生の研究を基に組み立てられた歴史地理の授業で、研究とは何かを実感できる授業でした。独創的な研究者の知的営為には鳥肌が立つほどの面白さがありました。そこで、地理と歴史のどちらかを選ぶのではなく、

どちらもできる歴史地理学があることを知って、京大に来てよかったと思いました。

### ●研究の苦しさ、覚悟と喜び

卒論は、著名な歴史都市であるにも関わらず、歴史地理学的研究はなされておらず、当時の研究の盲点であった鎌倉をテーマにしました。膨大な中世の記録を読み、発掘調査のデータを一つ一つ確認しながらも、それがどんな成果に結びつくのか分からず、今一つ気乗りしない作業でした。ただ、卒論提出前の最後の詰めで、無駄かも知れないと思っていた「点」と「点」の情報繋がり、階段を駆け上がっていくような思考の上昇を経験しました。

しかし、その後の修論はとにかく苦しいだけで、出来は惨憺たるものでした。卒論はビギナーズブラックだったと思い知りました。結果的に、博士1年次に、一から調査し直して、修論を一字から全て書き直したときに、卒論と同じ一筋の光明が見えました。プライドを捨てての修論の完全な書き直しは、相当の覚悟と労力が必要でした。しかし、この経験がその後に、失敗し

でも諦めない、再挑戦するという姿勢を作ってくれたので、無駄な経験ではなかったと確信しています。

### ●フィールドの力、過程を楽しむ心

日本の地域には歴史地理的な個性・特性があり、その土地ならではの魅力があります。研究では、その場所で歴史地理の痕跡を自ら確認し、頭の中の地図を作るフィールドワーク（巡検）を重視しています。一見ただけでは歴史的景観が全く見えない場所であっても、頭の中に作られる今と過去を結ぶ地図の断片は必ず研究のヒントになります。自分の目で見て、聞いて、感じて学ぶ巡検は、常に新しい発見に満ちています。特に学生達とともにわいわいと勝手な推論を交わしながらの各地の巡検は、私自身も本当に楽しいです。

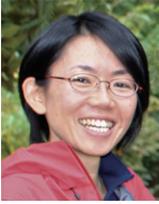
研究は成果ではなく、過程だと思っています。私は要領が悪い上に、過程を楽しむ気質が強くて、喫緊の論文に直接結びつかないことが薄々分かっているにもかかわらず、まずは着手します。最初にうじうじ悩むよりも、たとえ無駄になっても前進する姿勢だけは、指導教員に褒められました（笑）。そして、往々にして締め切りまでの時間が不足する、焦る、失敗するという結果になることに。ただ、その時は使えなかった情報や知識も自分の血となり肉となって、必ず後から自分に戻ってくるので、過

程を楽しむ心はやめられません。

### ●バランスを取ることの難しさ

最近、介護が必要な高齢の母に時間を割くことが多くなりました。母といえる時間は自分の存在意義をそこで感じ、もっと時間を割きたいと思います。一方で、研究は確かに好きなことではありますが、反面、追い詰められた時の逃げ場のなさは苦しいです。研究とそれ以外の生活とのバランスの悪さは、今でも解消できていません。

そんなときに思い出すのは、学生時代の「人文地理学」の高揚感です。あの時の私のようなキラキラした目で今の私の授業を受けてくれる学生達や、一緒に行ったフィールドで盛り上がる学生達を見ると、地理学の面白さ・意義を大学という場で伝えることの励みになります。研究のみならず、人生に無駄な経験は一つもありません。目の前の人ともに真摯に向き合うことを、日々心がけたいと思っています。



## 石原正恵

(フィールド科学教育研究センター・准教授/ 声生研究林 林長)

### ●環境問題を考えるきっかけとなった 海外生活

商社勤務だった父は転勤が多く、私も国内・海外を転々とする幼少期を過ごしました。特にタンザニアで暮らした3年間の体験から、将来はアフリカの農村開発をして、貧困・環境問題を解決したい、と考えるようになりました。高校生になって本格的に進路を決めるときには、熱帯についての研究体制が整っている京都大学を選択し、受験勉強に励みました。

### ●研究者の道へ

京大は入学してみると、おもしろい先輩や先生がたくさんいて、海外の課題は日本の課題でもあるということに気づきました。また、今の研究に繋がる素晴らしい指導教官にも出会えました。「～しなくてはならない」ではなく、自分の好きなように楽しく研究しよう、オリジナリティの高い研究をしよう、という先生の哲学に触れました。その結果、樹木が若木から老木までの数百年という長い一生をどう生きているのかを最初の研究テーマとして選びました。木に登って調査しながら、木

は自分が生まれた場所から動けないですが、若木から年をとるまでその時々々の環境や目標に応じて、毎年あるいは四季を通じて少しずつ動いていることを目の当たりにしました。人間とは異なる時間軸とメカニズムで生きている樹木をもっと知りたいと思うようになりました。

その後、全国の長期森林データを解析する環境省のモニタリングサイト1000プロジェクトや日本長期生態学研究ネットワークなどに関わり、海外も含め多くの森林に行き、様々な研究者に出会いました。現在は、樹木の種多様性がどのように決まるのか、多様性や樹種ごとの生態が森林全体の機能とどのような関係にあるのかについて、昔の人が集めたデータも含め統合的に解析しています。

### ●家族や周りの協力を得ながらの研究生活。感謝の気持ちを忘れずに。

長いポストドクの期間中に結婚、出産を経験しました。結婚当初から別居婚でしたが、さすがに子どもができたので同居し、パーマネントの職についていない私が育児を主に担当すると考え

ていました。でも、公務員の夫からの提案で、私は研究者としての業績を積むため産休を終えると同時に研究職に復帰し、夫は育休を取り一緒に京都そして北海道で暮らしました。夫の育休が明けた後は、夫は職場のある兵庫県で子ども達と暮らし、私は単身赴任で平日は専ら研究に打ち込み週末は家族と一緒に過ごす、という別居生活が始まりました。私が芦生研究林に勤務することになった今は、長男と次男が地元の小学校に入学し、私+長男+次男、夫+三男という別居スタイルです。兄弟が離れて暮らすのは可哀そうだなと思うことはあります。育休を取り時短勤務をしている夫が職場でどう思われているのかも気になります。ですが近い将来、私達のスタイルも「特殊」でなくなる時代が来ることを願っています。

●森を見つめ、色んな人とともに、森と人との持続的な関係を創っていききたい。

世界そして日本の森は、気候変動、シカの食害、開発、管理不足など課題が山積みです。研究者だけでは解決しないことのほうが多いです。多様な分野の研究者が協力するだけでなく、産業界、行政や一般市民など様々な分野の人と協働していく超学際研究が重要だと国際的にも言われてきています。私も芦生研究林のある美山町を中心に

そうしたプロジェクトを始めたところ  
です。意図せず、高校生のころの思い  
に戻ってきているとも言えます。美山  
町に暮らしてみて、熱い思いの方がた  
くさんいて、私自身が日々たくさん  
のことを学ばせていただいています。従  
来の科学とは異なる新しいものが生ま  
れつつあるのかもしれない、新しい知  
を生みだしたいとワクワクしています。  
一方で、研究者が果たすべき役割とは  
何なのか、科学者としての責任とは、  
と悩むこともあります。でも、諦めず  
に、前向きに遠くを見据えてじっくり  
と進んでいきたいです。





## 服部 佑佳子

(生命科学研究科・助教)

### ●興味の赴くまま学べるだけ学ぶ

福岡県で育った私は、田んぼや山、川、海で遊ぶ機会も多く、草花や虫、浜辺の生き物など自然に親しみながら成長しました。また、幼い頃から漠然と理系への憧れを持っていました。それは技術者の父から自然科学や論理的思考の重要性を聞かされて育ったからかもしれません。しかし、研究者を志した契機は中学時代にあるように思います。尊敬する友人が高校生で胃癌になりました。癌の原因は何か、細胞はいつどのように増殖するか、癌になる人ならない人の違いは……。図書館で手当たり次第調べてみても、納得できる答えは得られませんでした。ヒトを含めた生き物の仕組みには、まだ誰も知らない重要なことが山ほどあるのではないかと、それらを自分で明らかにしたい。そんな思いを抱いて県立高校の理数科に進学し、勉強に励みました。

大学進学後は生物学だけでなく、数学、物理、化学、情報科学など、興味の赴くまま学べるだけ学びました。また、自分がこの先どこで何を研究するかを模索し、色々な分野の友人知人と話したり、日本やアメリカの大学や研

究所を訪問し、多くの研究者や大学院生から最先端の研究について話を伺ったりしました。その中で興味を持ったのが、当時次々と解読され始めていた生物の全遺伝情報（ゲノム）でした。生き物の設計図であるゲノムがどのように使われ発生過程などの生命現象を支えているかを研究したいと思い、ショウジョウバエを用いて、神経細胞が細胞ごとの特性を獲得していくメカニズムの解析に取り組むことにしました。

### ●大規模データから生命現象を読み解く

近年、生命科学分野では、遺伝子発現や代謝産物の網羅的解析（マルチオミクス解析）技術の発達により、従来の生物学では扱うことが難しい生命現象にアプローチが可能となってきました。そこで、独自の実験系から得られた大規模データを、バイオインフォマティクスにより統合解析し、生物学的な意味を丁寧に読み解くことで、神経細胞の突起発達を担うサブタイプ特異的な転写調節プログラムや、栄養環境への適応応答機構を明らかにすること

ができました。ショウジョウバエと哺乳類では、遺伝子、組織やホルモンなどの多くが共通しており、これらの研究成果が、ヒトの神経発生や栄養への適応の分子メカニズムを理解する足がかりとなることが期待されます。現在は研究を更に発展させ、ショウジョウバエの成長を支える共生微生物叢の研究や、栄養条件が神経突起の発達に及ぼす影響とその分子機構の解析にも取り組んでいます。

研究を続ける上で大切にしているのは、データと真摯に向き合うこと。また、共同研究者だけでなく、様々な分野の多くの人と議論する中で、問題意識を明確にし、新たな視点や手法を柔軟に取り入れながら研究を推進することを心がけています。生き物の仕組みには、今なお不思議が満ちています。生物同士や環境との相互作用の上で成り立つ生命現象とその原理を、独自のアプローチで解き明かしていきたい。研究の面白さ・楽しさを大学院生や共同研究者と共有しながら、複数分野をつなぐ新たな研究領域を開拓していければと思います。

### ●子育てを通して広がった研究と生活

大学院修士課程在籍中に結婚し、二人の子どもに恵まれました。感想は、研究と子育て両方やってよかった！です。何より世界が広がりました。子どもの希望で、虫や魚を捕まえて家で飼

い始めたところ、生き物同士や環境との微妙なバランスや相互作用、物質循環の上で命が成り立つ様を目の当たりにし、現在の研究テーマに非常に大きな影響を与えてくれました。また、子どもを通じて、理系以外にも様々な人たちと出会い、楽しい時間を共有することもできました。周囲の協力で支えられながら、家族の体調管理（栄養、睡眠、適度な運動）を最優先に、完璧を目指さず、自分ひとりで抱え込まず、なるべく毎日同じリズムで生活することを心がけて、研究と家庭生活とを両立させています。

時間的、物理的な制約はもちろんありますが、子どもが小さいころの一時期だけと割り切って楽しむことにしています。研究の推進は子育てだけでなく、個人的、社会的な諸々の事情に影響を受け得ますが、その時々でのシステムの最適化や、柔軟性、周囲との対話の積み重ねで乗り越えていけると思っています。



## 鬼頭 弥生

(農学研究科・講師)

### ● 悩み抜いてたどり着いた研究職

高校生時代は吹奏楽部の活動に明け暮れていました。他のメンバーとともに部内の意思決定にも関わり、しばしば起こった揉め事に頭を悩ませたこともありました。当時は自覚していませんでしたが、揉め事の最中には、友人や先輩それぞれの行動原理が気になったものです。すでに人の認知や意思決定に興味があったのかもしれませんが。学業面では、食や環境、生物学に関心があったため、高校の文理選択時には迷わず理系を選択しました。漠然と研究職に就きたいという希望も抱いていました。こうした関心と希望のもとで京大農学部を受験し、食品生物科学科に入学しました。

自分自身の興味関心に向き合うきっかけが訪れたのは、大学に入学して半年後の2001年9月10日。日本で初めてのBSE牛が発見され、その翌日には関連記事が紙面に並びました。BSE問題に関して、当初は発症のメカニズムや健康リスクについて知りたいと思い、専門家による科学的な解説等の情報を積極的に収集しました。しかしながら、私が科学的情報よりも強

く関心を抱いた対象は、一般市民の意識や行動と、それをめぐる専門家の言説でした。その段階で、自分自身が、食品そのものよりも、食をめぐる人の行動や社会の仕組みを追究したいのだということに気がきました。BSE牛発見の翌日は、アメリカの9.11同時多発テロが起こった日。価値観を揺さぶられるような当時の社会情勢のもとで、物事を相対的かつ客観的にみることが重要だということも強く感じました。

その後悩んだ末に、2年進学時に総合人間学部へ転学部し、文化人類学分野に身を置き、食品流通過程における人間関係と商品の価値形成について研究することにしました。漠然とした像でしかなかった研究職について、より具体的に考え、それを目指す覚悟をしたのは、修士課程に進学した直後です。具体像を結ぶなかで、農や食をめぐる社会問題に即して研究・議論し、提言していく学問領域で研究者を目指したいと考えるようになりました。そして、再び悩んだ挙句、農業経済学分野へ転向しました。

## ●国内外の農業・食料に関わる問題に 貢献したい

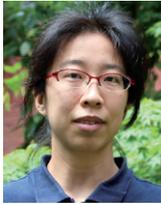
私が所属した研究室では、農業経営学を基礎としながら、農業経営に影響を及ぼすフードシステムや、食品安全等に関わる制度を扱い、農業・食料分野の経営学の発展を図っていました。かつ、異分野の手法や知見を積極的に採り入れる空気もありました。また、恩師をはじめ、女性研究者・院生を多くかかえる研究室でもありました。それは、研究者を目指すうえで大変心強いものでした。私は異動を経て再びその研究室の一員となりましたが、そうした気風は今も引き継がれています。現在、フードシステムについては、さまざまな論点が示され、多様なアプローチがなされています。その中で私は、フードシステムはその各段階の人や組織の意思決定や行動によって成立し変容しているとの考えのもと、彼ら／組織の意思決定、行動の実態やメカニズムの解明を研究テーマとしています。農業経済学の分野に所属していますが、社会心理学の理論や手法を採り入れ、消費者の食品選択行動や風評行動の背景にあるリスク認知を調査し、どのようにリスクコミュニケーションを進めるべきかを研究してきました。最近では、持続可能なフードシステムを念頭において、生産から消費に至るまでの各段階にある人や事業者が、どのように意思決定を行っているのかにつ

いての研究にも取り組んでいます。食をめぐる人の行動や社会の仕組みを明らかにして、新たな知識を生み出すことによって、社会に何らかの貢献ができればといつも考えています。

## ●完璧主義を脱却し、時間をうまく管理する

研究と生活のバランスを保つため、時間を上手に管理するよう心がけています。ですが、きっちり管理するのではなく、完璧主義を脱却し、自分自身のダメなところも自覚しながら、時には自分にあまくするようにしています。人は、最良の結果や完璧な結果でなくても満足できるもの…とはいえ、研究と教育においては最良を目指しがちになってしまうので、家事については心地よく満足できればよい、ということにしています。

今後の目標は、長い時間軸で考えながら、研究を通して社会に貢献すること。教育においても、将来社会で活躍する学生達に、学術面に限らず何らかのプラスの影響を与えることができればと思います。異なる領域の研究にも興味をもって学び、自分と異なる見解にも耳を傾けてその立場で考えること、自分の価値観が偏っていないか絶えず考えてみることを常に心に留めて、広い視野をもって自身の立場を問い直しながら、研究を続けたいと思っています。



## 三野和恵

(教育学研究科・助教)

### ●先祖の母国、台湾への思い

高校進学後、好きだった数学の成績が振るわず、古生物学者になる夢を諦めました。一方で、以前から好きだった世界史や漢文・古文・現代文の授業を楽しみ、歴史研究部に所属し、記事を書き冊子を作るうちに、歴史をやってみようと思えるようになりました。そこで大学は、歴史学が充実している憧れの京大文学部を、不合格覚悟で受験。第二志望は、私に読書好きになるきっかけをくれた伯母の母校で、リベラルアーツ教育を掲げている国際基督教大学（ICU）でした。京大に落ちたのは残念でしたが、ICUのキャンパスや雰囲気は気に入り、合格後迷わず進学を決めました。大学の授業はどれも面白く、深く印象に残りました。例えば歴史学の授業では、奇想天外な内容の史料との向き合い方を学びました。また、キリスト教に関するクラスでは、その後大学院で思想やその歴史を考察する中で大きな影響を受けました。卒業論文は歴史学で、台湾のキリスト教をテーマにしました。台湾人でキリスト者の母を持つという自分の背景があったものの、自分にとって台湾は「あまりよく知らない故郷」で、時折祖父母や他の親戚を訪ねて短期滞在するのみで、当然台湾語も話せませんで

した。植民地教育を受けた祖父母とは日本語で、マンダリン教育を受けたいとこ違とは身振り手振りで、後には片言の英語で意思疎通をし、台湾の人々の他人に対するフレンドリーさや、活発さに魅了されました。こうした言語的・文化的な隔たりを超えて台湾のことをもっと知り、その社会の中に入っていきたいという願望が研究テーマの選択、台湾語やマンダリンの学習の動機となりました。同時に、植民地時代に育った祖父母の経験をもっと知りたい、理解したいという考えもありました。その時代にそれぞれ医師と教師になった祖父母は、共に教育の機会に恵まれた幸運な人たちであり、日本人の親しい友人も多くいましたが、例えそうした中でも植民地支配を受けるということで、決定的に傷つけられていたのだということを深く考えさせられました。宗教・思想について考える際に、とりわけこれらが植民地支配下を生きる／あるいは差別的な状況の中で生きる人々にとって、どのような意味を持ち得たのかという問題に関心を持つようになったのは、こうした背景があったからだと思います。

### ●目標は、研究成果を国内外に発信していくこと

京大教育学研究科へ進学後は、日本

植民地支配下の台湾で活動したスコットランド人宣教師キャンベル・N・ムーディに焦点を当て、彼が被植民者とされた台湾の人々と出会う中で、「西洋的近代」と癒着した当時のキリスト教像を問い直し、台湾人の反植民地主義ナショナリズムへの共感的姿勢を表明するに至った経緯を分析しました。同時に、ムーディが在台宣教師が設立に関与した、台湾基督長老教会の聖職者・信徒らの教会新聞・神学雑誌上の議論も分析しました。その中で、これらの人々が日本による植民地支配や海外宣教師による文化的優越意識を前にしつつ、独自の仕方でもキリスト教を自らのものとして内在化してきたこと、「台湾人」でありまた「キリスト者」である者に固有の集団意識と使命感を構想・表明することで、自決権・社会正義・反植民地主義ナショナリズムと呼応し得るような、神学の萌芽を育てていった過程を捉えることができました。なぜムーディに着目し、彼と台湾の人々との出会いと相互関係を見ているのかというと、台湾とは深い繋がりをもちつつも、自分自身はその社会の一員であったことはなく、そうなりたいと願っているという立場にあることが関係しているように思います。これは物語を読むことが好きという部分とも繋がっていて、スコットランド、エディンバラでの研究滞在期にも深く思わされましたが、慣れない世界、異なる世界、知らない世界に入って、色々な人たちと出会い、知らなかったことを見聞きし、学ぶことに喜びを感

じるからです。今後は、台湾の地域社会と教会、植民地支配との関係をより細やかに見てゆくこと、そのためにも台湾語の史資料の収集と分析をさらに進めたいと考えています。また、これまでの研究を英語で発信することに努め、日本語以外の言語を使用する研究者とも、より活発に意見交換をできるようにすることを目標としています。

### ●一歩ずつ、着実に進む研究者への道

これまで「研究者を目指す」と意識したことはあまりなく、むしろ迷いながら今やるべきことをやっていく中で、ここまでやってきました。その迷いは修士時代まで非常に大きなものでした。考えを素早くまとめ発言するのが苦手で、このまま研究者養成コースを進んでいく資格が自分にあるのかと悩みました。ですが、修士論文を提出し博士後期課程への進学が決まった時に、非常に大きな解放感と励ましを与えられ、研究はたとえ自分のような遅めのペースの人でも着実に継続することで、自分なりの方法で進めていけると考えるようになりました。コツコツ研究作業をしていく中でいつの間にか道が開かれ、徐々に研究者ようになってきたという感覚です。「やるべきこと」とは、自分がやり始めた研究を、やり始めたからには良いものにしなければいけないということであり、研究を進めていく上で助けてくれた、多くの人たちへの応答としての意味もあります。これからも感謝の気持ちを忘れず大事にし、ずっと研究を続けていきたいと思っています。



## 澤田 茉伊

(工学研究科・助教)

### ●紆余曲折を経た研究者への道のり

大学3年生で本格的に始まった専門分野の基礎科目の授業では、地盤工学の科目がお気に入りでした。土には自然材料を数式で表す理論があり、またシンプルながらも土の性質がよくわかる実験方法が確立されている点に惹かれました。実験科目は、6人程度の班ごとの実験でしたが、全部自分がやりたいくらいでした。その願いが叶い、4年生では地盤系の研究室に配属が決まり、卒論では地下室に籠って毎日実験をしました。研究室での指導は厳しかったですが、アットホームで、学生同士の仲が良く、修士課程を修了するまでの3年間を楽しく過ごすことができました。修士課程を修了した後、実務における研究に携わってみたいと思い、ゼネコンの研究所に就職しました。4年半でいくつかの業務に携わりましたが、自分に自信が持てず、行き詰まりを感じていました。私には向いていなかったのだと思います。転職を考え、修士時代の恩師に相談したところ、もう一回勉強したら？と助言をいただきました。自分が変わるしか解決法がないことを、先生は見抜いていたのだと思います。正しい選択だったとはいえ、リーマンショック、東日本大

震災と続いた時代だったこともあり、会社を辞めて博士課程を受験するには、勇気が必要でした。ですが、3年後に泣いても笑っても勉強は無駄にはならない、何より自身が変われる、そんな気がしました。博士課程で所属した研究室の先生は、母校に戻った変な卒業生を快く受け入れ、指導してくださいました。自分の意志で入学したものの、会社員から学生になって大きく生活が変わり、将来への不安感から、なぜ自分だけこんなやり直しをしているのだろうと情けなく思うこともありましたが、3年間しかないのにこんなことを考えている暇はないと気づき、必死で勉強しました。今思えば、先生方や家族の多大なサポートにより、やり直すチャンスが得られた私はとても恵まれていたと思います。自分なりに研究を進めて先生と議論を繰り返す中で、少しずつ研究を計画・推進する力が身につくと、研究がどんどん楽しくなりました。このような紆余曲折を経て、プロの研究者になる決意をしたときには、もう32歳になっていました。

### ●未来の人たちに古代の景色を見てもらいたい

専門は地盤工学で、私の研究では古代の地盤構造物が対象です。日本には、

古墳、石垣、窠跡など土で造られた遺跡が豊富です。例えば、全国に15万基以上とも言われている古墳。最近では、百舌鳥古市古墳群が世界遺産に登録されるなど、注目を浴びていますが、築造から1300年以上の間、地震や降雨を受けて危機的な状態にあるものも少なくありません。損傷を受けた古墳を未来に受け渡すためには、修復が必要ですが、外観だけ元通りにしてもかえって状態が悪くなることもあります。損傷のメカニズムを明らかにして、科学的根拠に基づいた方法で修復することが重要です。ですが、その損傷メカニズムはかなり複雑で、例えば雨や地震で墳丘が崩れると、内部の石室に水や熱が伝わりやすくなります。壁面がある場合には、カビや結露による劣化が促進されます。雨による被害の拡大を防ぐため、ブルーシートで墳丘を覆うと水分の供給が絶たれ、極度に乾燥して脆くなってしまいます。これらを一つの学問で解決するのは不可能で、地盤工学、建築環境工学、保存科学などの関連する分野の協力によって研究が進められています。このうち地盤工学は、墳丘内の水・熱の移動、地震や降雨といった外力によって生じる変形を担当します。具体的には、現地で墳丘やその下がどのような層構造になっているのかをボーリング等で調べ、採取した墳丘の土を使って、実験室で強度や透水性を調べます。そして、実験結果をもとに墳丘をモデル化し、数値解析上で地震や降雨を与えて、墳丘内にどのような力や変形が生じるかを計

算します。この計算結果から、実際の損傷の原因を考察し、効果的な補強や遮水の方法を提案します。未来の人たちが遺跡を通じて、古代の景色を見ることができるよう、研究者・技術者として保全に貢献し、「〇〇の研究といえば澤田」と名前が挙がるような、その分野をリードする研究者を目指していきたいです。

### ●地道な一歩の積み重ねが自信につながる

研究者は、比較的フレキシブルな時間の使い方ができますが、毎日同じ時間に寝起きし、仕事を始め、終えることにしています。そうすると一日の目標が立てやすく、制限時間内に達成するためには、どのような順で取り掛かればよいかなど、自然と計画できます。達成できずに悔しい日も多いですが、達成できた日は気分爽快です。私はあまり要領が良くなく、努力しなければできないタイプなので、研究は一歩ずつしか進みませんが、着実な一歩がモットーです。大きな研究ビジョンを掲げていても、日々は小さな困りごとの解決に一喜一憂する連続です。期待した実験結果が出ないときには、原因究明のために装置や手順をひとつずつ丁寧に検証し、修理や見直しをします。回り道のようなのですが、疎かにした一歩は、後でかなりの確率で困ったことになり、大きな手戻りが出てしまいます。自信をもって研究成果を発表するためには、地道な一歩の積み重ねが不可欠だと思っています。



## 田 鶴 寿弥子

(生存圏研究所・助教)

### ●ターニングポイントとなったカナダの自然

幼少の頃より、自然豊かな田舎でカエルや虫の鳴き声を聴きながら、空と山を毎日眺めて過ごしました。泥水や木の葉のにおいがかぐと、好きだったおままごとのことが今でも鮮明に思い出されます。父が務めていた博物館には古い土器や遺物が並び、それを研究者が一つ一つ調べて歴史の側面が明らかになる、そんな行程が幼い自分にはとてもキラキラとした光景に映りました。自分の世界に浸るのが好きだった私ですが、小学生の時に両親が送り出してくれたカナダとアメリカへの体験留学は、自分にとって大きなターニングポイントとなりました。飛行機から見た初めての空と雄大なカナダの森林、そしてホームシックの両方に泣いたことを今でも覚えています。その頃から、自分が知らない世界を知りたい、飛び込んでいきたい、という気持ちが少しずつ芽生えてきたのかもしれませんが。高校時代を思い返すと、笑顔で楽しそうに物理学の実験をくりかえす恩師の姿と言葉が印象に残っています。京大を受けようかなと相談したとき、笑顔で思い切り背中を押してくれたのもその先生でした。京大へ入学後は、図書館や古本屋さんで見つけたいろんな本を読みあさりました。父の仕事の

関係で実家にも膨大な書物が山積みになっていたので、本の香りを嗅ぐと心が落ち着く、そんな大学生でした。古本屋さんで素敵な本を見つけては読みふけていたある日、古本に挟まれた古びた一枚の紙きれを見つけました。ドラマのようですが、そこには、【この本を手にした方へ】とあり、【やりたいことをやるべし】と書かれていました。分厚い本におそらく長い間挟まれていただろう、どこの誰かも知らない古の先人からのメッセージは、当時、壁にぶつかり悩んでいた私への大きなエールになりました。

### ●木を取り巻く世界に魅了されて

学部生のころ、当時の木質科学研究所（現：生存圏研究所）で、文化財の樹種を科学で調査する研究が行われていることを知り、扉をたたきました。シルクロードの遺物調査、歴史的建造物や木彫像の調査、新しい識別手法の開拓、年輪の同位体比研究など、木が教えてくれる幅広い情報に夢中になりました。なにより、顕微鏡でみる木材組織の美しさと複雑さに魅了されました。徐々に、木製文化財の樹種を科学的に調べること、それにより日本やアジアの適所適材な用材観や歴史を解明する、という文理融合的な研究に魅了されていきました。そして今は、人々の信仰や宗教に関連しながらも、用材

観へのアプローチがあまり進んでいない東アジア地域の木彫像や建造物などの文化財に注目し、データの蓄積と解析をすすめ、人間と木の関わりや日本文化ならびに東アジアにおける文化交流の歴史を紐解く研究等をしています。日本の木彫像の用材には、大陸からの仏教や禅、陰陽道といった様々な文化が大きな影響を与えたと考えられますが、日本に比べて、近隣アジア諸国における木彫像の樹種情報についての体系的な研究は、まだ少ないのが現状です。そこで、アメリカのボストン美術館、フィラデルフィア美術館、クリーブランド美術館などと、東アジアの古い木彫像における樹種調査を行い、各国で異なる用材観について、美術史の研究者らとともに多角的に考察しています。最近、欧米の美術館に保管されていた神像の樹種調査から、国内外へ散逸してしまった神像群の発見につながる研究があり、美術史の研究者たちと大いに盛り上がっています。私の研究は、木を軸に、美術史、考古学、建築史、地球化学といった分野の研究者だけでなく、数寄屋大工、彫刻家といったプロフェッショナルな方たちとともに行います。木を見て森を見ずとにならないように、様々な木の専門家たちの言葉や教えをしっかり糧として、しなやかに大胆に、調和のとれた研究をすすめたと思っています。大好きな木やたくさんの人の手で守られてきた文化財と真摯に向き合い、若い世代や社会に、もっともっとおもしろいことを還元できるような研究をしたいと考えています。

### ● 「母」も「好きな研究」も両方できる有難さを噛みしめて

仕事で海外に行く機会が増え、家庭や子供を持つ同じ立場の様々な国の女性研究者らとの関わりも増えました。日本に置いてきた幼い子ども達のことを毎日心配している私が言われたのは、「母親がいない間にこそ、子どもは何かを得て立派に育つよ」という言葉でした。「子どもはもちろん大切だけれど、子どもには子どもの人生があり、母親の頑張りはきっと子どもに伝わる、あなたはあなた自身の人生を尊重しなさい。だから、ほらビール飲んで！」という励ましの言葉も。女性・男性関係なく、一人の人間として、自分の人生をいかに大切に生きるか、そのような観点からの言葉が、とても強く心に響きました。やはり共働きとはいえ、今の日本の社会構造ではまだまだ女性が家事育児、特に“名もなき家事”に費やす時間は長いように思います。自己嫌悪に陥ったりすることも多々ありますが、もとより私は完璧な女性（妻）ではなかったからと自分に言い聞かせて笑ってごまかすことにしています。疲れていても研究のことを考えるとウキウキし、「お仕事ががんばってね」と書かれた手紙を子どもから貰えるとニヤニヤするほどうれいします。「母（妻）」も「好きな研究」も両方させてもらえるという有難さを噛みしめながら、今を大切に、支えてくれる家族、双方の両親、そして職場の人々に感謝しながら、一步一步大切に研究を続けていきたいです。

